るからして、自分の居る所の村でもいさかひが出來て、アチラでもコチラでも感情の衝突と云ふことが起ることになる、若しさう云ふ感情の衝突と云ふことがなくなつて、よく調和と云ふことが互に出來ることになつて見れば、何事を相談しても、直きに極く圓滿に事が纏まることになるのである、夫れであるからして、此の調和と云ふことが一番大切であると、斯う云ふ意味をお述になつたのである、これは千三百年の昔に御述になつたのでありまするが、實際は今日でも其の通りであらうと思ふ、世間萬事、何から何に至るまで、調和と云ふことが無くて物の出來ると云ふことはない、人皆黨あり、今日も皆其の通り、徒黨と云ふものがドコへ行つてもある、政府の上にもある、議會の上には無論ある、一つの物の中で、誰れの黨ぢや彼れの黨ぢやと別れる、町の中でも勿論、あれはどの系統である、あの系統の人であると云ふ譯になる、夫れだから町の事を相談するにしても、村の事を相談するにしても、其の黨によつて話が纏まることがある、今日村の爲になることでも、町の爲になる事でも、自身の反對黨の云ふ事には、ドコまでも反對して掛ると云ふことになつて、ツイ結構な事も纏らずして了ふと云ふやうな事は今日比々ドコへ行つても見ることである、何からさう云ふことになつて來るかと云ふと、即ち大體の事に達しないからである、唯だ黨派の事にのみに括られて、事の大體と云ふものに達しないから、さう云ふ譯になつて來るのである、そこで若し大體の事理に達し黨派と云ふ小さな處に括られなんだなれば、總ての人間がよく調和と云ふことが出來て來ると云ふことになりやア、どのやうな事が出來て來ても、相談すれば直ぐに夫れが纏ると云ふ譯で、如何なる事も立派に夫れが成就すると云ふやうな次第である、で千三百年の昔に仰しやつたのであるけれども、今日へ之を持つて來ても、誠に適切な事であら

うと思はれる、兎に角此の人間界の事は、調和と云ふ事ほど大切な事はない、宗教であらうが道德であらうが、政治であらうが、何から何に至るまで、調和と云ふことを缺いて來たら、本當の事は出來る譯はありはしない、一軒の家が圓滿に行くと云ふのも、卽ち家内中の調和と云ふことから出來る、一ケ村が立派に發達すると云ふのも、立派に自治が出來ると云ふのも、模範村として持て囃されるのも、皆此の調和と云ふ所から出來て居る、調和が一つ缺けたら、どのやうな立派な人が出て來て骨を折つた處で、中々出來る譯のものぢやないのです、で調和ほど大事なことはない。

ところが今日は調和と云ふことが總ての方面に皆んな缺けて了うて居る、前に申す如く、政府の間にも黨派があり、議會の間にも黨派があり、夫れは申すまでもないことであるが、夫れのみならず總ての方面に調和と云ふことが全るで缺けて了うて居る、よう考へて御覽なさい、宗教の上でも道德の上でも、今日の處では皆んな矛盾なんです、マア道德の上から申すと云ふと、教育勅語と云ふものは道德の標準になつて、どの學校でもどの學校でも盛んに說かれることであるが、法律と較べて見ると矛盾である、教育勅語の上では忠孝主義である、ドコまでも忠孝と云ふことを御奬勵なされてあるのである、日本では是れでなければならぬ、ところが忠孝と云ふものは一體何から起るのであるか、どう云ふ處から忠孝と云ふことが出來て來るか、今日世間で言ふやうに、權利ぢや義務ぢやと云ふことを言うて居つて、一體忠孝と云ふことが出來るものか、權利義務と云ふことゝ忠孝と云ふことゝは、私は大變矛盾したことゝ思ふ、法律の上では權利義務の規定、道德の上では斯うだと、二つに離して了へば大變都合が宜いけれども、實際はそんな具合に行くものではない、實際の上になつて來ると、法律と道德を別にして置

いて、さうして道徳の方の側だけドコまでも立派に行ふと云ふことは、迚も出來る譯のものぢやァない、道徳の方の側で申すと云ふと、大切にせんければならぬ、親が、少々無理なことを言うても、自身の親の事であるから、親の心の休まるやうに、親の意思に從うて行かんければならないと、斯う教へる、ところが法律の方の側では、權利義務の方の側であるから、何んぼ親だとて、無理言うたら聽く必要はないと云ふやうなことになる、そこで學校で教へる事と裁判所で裁判する事とは矛盾すると言はんければならぬ、唯だ裁判だけなら宜いが、今日は已に一般の頭が法律的になつて居る、權利義務と云ふ考がズッと重くなつて居る、親孝行と云ふやうな事を幾らして見た處が、忠義など云ふことを幾らして見た處が、何んにもならないと云ふやうな考へがトントの奥底にあつて終には圓い物でも四角い判斷をすると云ふやうな譯になる、で學校で八釜しく言ふ道徳と云ふものは、なんの權威もない、唯だ口で八釜しく言ふだけである、教職員が口が酸くなる程話しても駄目な話である、夫れによつて實行を見ることは出來ないと云ふやうな譯になる、ソコへ持つて來て前に申すやうに、耶蘇教などの連中が、忠孝は役に立たぬと云ふやうなことを言ふことになりやァ、教育勅語を八釜しく云うた處が仕やうがない、是れほどの衝突矛盾、不調和なものはあるまいと思ふ、宗教の上でも矢張りさう云ふやうな所が幾らもある、其の話をすると中々長い事でありますから略して置きます、總ての方面が皆さう云ふやうな矛盾ばかりで、不調和なことになつて居る、斯う不調和なことばかりがあつてからと云ふものは、社會が立派に、順調に發達して行くと云ふことの出來さうな筈はないと思ふ。

で此の調和と云ふものが大事である、矛盾した處はドコまでも調和の出來るやうにせ

んければならない、其の調和と云ふものは何から出來て來るかと云ふと、隨分六ケしい問題である、教育家の心配する處で、宗教家でも道德家でも、此邊には大變心配をして居るけれども、中々どうも、斯うしたら宜からうと云ふものが見付からない、又社會の制度のことに就ても、日本の爲には家族制度を維持して置きたい、この國體を維持する上に於て矢張り家族制度が大事である、けれども家族制度が大事と云うても、今日一般の人間の頭はどんな振合ひになつて居るかと云ふと、個人制度の頭である、表はさうならないけれども、心のドン底を探れば個人主義である、のみならず、事實がさうなつて居る。

私の今居る處は本鄕西片町で、以前は阿部公の屋敷であつて、大變靜かな好い處であつたが、今日は實に見違へるばかりに家が建ち込んで了うて、一向値打のないものになつて居る、十番地と云ふ一つの番地の中に六七百戸もある、大きな村よりもまだ多いと云ふやうな有樣である、然るに其の中に、二十年と續いて居る家はどれだけあるか、實に尠いものである、私共が今では古株である、十二三年居るが、夫れで餘程古株である、立派な家がアチラコチラにも建つて、あの家はイツまでも玆に居る積りぢやらうと思つて居ると、イツの間にやら餘所へ行つて了ふ、さう云ふやうな譯になると、其家に育つた子供は、先祖と云ふものを話した處が其味は分らぬとになる、先祖と云ふ觀念、親と云ふ觀念の强くなるのは、此の家は卽ち祖父さんが建つて置いた家である、と云ふやうな處から、先祖と云ふ觀念が强くなり、又親のお蔭と云ふことも感じられる、其の親類と云ふものも矢張り其の近邊に始終あつて、節句とか祭りとか云ふ時に往來をすれば親しくなる、ところが自身の都合の好い土地さへあれば、ドコ

へでも移ると云ふ具合で、十年經つか經たぬうちに移つて了ふと云ふことになれば、親のお蔭は分るかも知れぬが、先祖と云ふことは全るで分らぬことになつて來る、親類と云ふもの丶味はひも分らぬやうになる。

さう云ふ有樣に社會がなつて來る、これは私の居る十番地ばかりではない、東京は總てさう云ふ有樣である、此邊でも追々さうなるだらうと思ふ、社會の形勢は皆個人制度の方に段々傾いて行くやうである、夫れで一方に於て、家族制度家族制度と八釜しく言うて見た處が、ホンマの事の出來る譯はない、これも矢張り衝突なんである、矛盾なんである、何から何に至るまで皆矛盾なんである、けれども之れを矛盾なりとて棄て丶置いたら隨分變なものになつて來るであらうと思ふ、乍併其の矛盾と云ふことは、政治上の矛盾であるとか、教育上法律上の矛盾であるとか云ふことは姑く措いて、お互ひの黨派の爭ひとか、或は感情の衝突とか云ふやうな不調和なものは、一體元は何から起るものぢやらうか、トントの其の根本はドコにあるのであらうか、不調和のトントの根本を一つお互ひは考へて見んければならぬ、其の根本は何であるかと云ふと、自身の胸の中の不調和が元なんです、自身の胸の中が不調和になつて居るから、隨つて不調和な事が起つて來る、ツイ何んでもないやうな事から感情の衝突が起つて、喧嘩も仕合ふと云ふやうなことになつて來る、夫れで人の矛盾を言ひ人の不調和を言ふよりも、先づお互ひ自身の此の胸の中の調和を計らんければならない、胸の中に不調和があるから其の不調和の處を能く調和するやうに計つて行かんければならぬ、胸の中の不調和と云ふものはどんなことであるかと云ふと、一寸口で言うて見やうはないけれども、銘々胸の中へ首をつッ込んで考へて見るとよく分る、我々の胸の中は、朝から晩まで不調和な事ば

かりである、今日では理性が餘程發達して、道理が大變分るやうになつた、けれども其の道理の方で考へる事と、自身の胸の中の實際とは全るで矛盾である、斯うせんければならない、あァせんければならないと云ふ道理は能く分つて居る、けれども實際になると、どうも夫れが出來ぬと云ふことになる、極く早い話が、酒を飲んではならないと云ふことは誰れでも分る、そんなら酒を飲まないかと云ふと、マァ待つて呉れえと云ふ譯になる、夫れと恰度同じやうな譯なんです、道理の上では、斯う云ふことは可けないと云ふことを能く知つて居る、道理は能く知つて居る、知つて居りながら、夫れは道理で、イヤ實際はどうもさうは行かぬと、云ふことになる、道理がよく分つて居りながら、自身の心が其の通りになられないと云ふのはどう云ふ譯であるか、斯うならなければならないことである、あァありたいものであると云ふ處まで行つて居る、ソコまで行つて居

れば、實際もさう行けるかと云ふと、さうは行かぬのです、夫りやァ早く言へば知識の方が足らぬと言ひ、或は情の整理が附いて居らぬからぢやと云ふ者もあらう、併し乍ら知識の方が大變强健なものになり、理性と云ふものが大變發達をして來れば、夫れで胸の中を調和させて行くことが出來る、けれどもさうなるのは中々容易なことではない、今日の人は、常識さへあれば好いと言ふけれども、常識さへ拵へれば、夫れで胸の中がドコ〳〵までも調和が出來て行くと云ふことは出來ない、一寸理窟では、常識さへあれば宜いやうなものであるけれども、常識通りに心が伴うて行くかと云ふと、中々さうは行かない場合がある、そこで教育が幾ら進んでも、常識が幾ら發達しても、夫れで麗はしく自身の胸の中が調和が出來ると云ふ譯には行かない、教育が進んだと申しても、五年や六年の中學校を卒業した、高等學校を卒業した、或は大學を卒業したと云うた處で、

其の者の胸の中が、ドコまでも調和が出來るかと云ふことは覺束ない、夫れは殆ど出來まいと私は思ふ、ぢやから一方から云へば、教育が盛んになり知識が進むと云ふことは非常に結構なことであるけれども、實際を云ふと、格別夫れは間に合はない、學校で教育して居る間は、大變立派に修まりさうであるけれども、さて實際になつて見ると、中中さうは行かぬ、學問の方から言ひ、知識の方から言ふなれば、其の方で自身の胸の中をドコまでも調和して行くことは出來ぬことではない、出來ることであるけれども、乍併夫れには十分に教育を進めんければならぬ、知識を發達させんければならないが、今日では夫れは不可能である、昔の學問なれば或は出來るかも知れぬ、昔の學問と云ふものは、讀む書物も聽く事柄も、總て覺える處の事柄と云ふものが、皆んな自身の精神修養になる事ばかりであつた、精神修養を專門に遣つて居つたと云ふやうな形である、夫れだから昔の學問を、十年遣り二十年遣ろうちには、其の方の力がウンと發達をして、胸の中の調和が出來るやうになつたかも知れぬけれども、今日の教育は、二十年遣つても三十年遣つても、精神修養を專らに遣るのではない、學校で遣る精神修養の時間と云ふものは極く僅かなものである、さうして專門の學校になると、歴史の處は歴史だけを教へ、地理の處は地理だけを教へるのである、夫れだから、夫れを幾ら遣つても、夫れで精神修養にも何んにもならない、成程十年二十年と學問をしたのであらうけれども、夫れで自分の頭の中のドン底までも鎮めるやうな力と云ふものは付くものではない、皆んな片々たる寄せ集めのものを頭の中に列べたと言ふに過ぎぬ、そんな學問で自分の胸の中の調和が出來さうなことがない、だから今日一般の胸の中の調和を計ると云ふことは學問では出來ぬと思ふ、どうしても情の方の整理を付けなければならぬ、即ち此の情

の方の側を柔げんければ、胸の中の調和は出來まいと思ふ、其の情の方を柔げるにはどうすれば宜いかと云ふと、コヽが甚だ六ケ敷い處である、よう考へて御覽なさい、あアすれば村の爲になる、斯うすれば町の爲になる、と云ふことは誰れでも分つて居る、けれども彼奴の云ふ事だからどうも贊成するのは殘念である、忌々しいと云ふ、夫れで爲になる事も贊成をせずして成立たせないと云ふことになる、さう云ふ心が所謂强情である、其の强情と云ふものが柔ぐやうにならなければ道德と云ふものは立派に行はれぬものである、其の强情はどうして取れるか、サア其處になると云ふと、此の信仰である、一ト口に言へば佛法、宗教と言うても宜いけれども、外の宗教では行かぬ、我が此の佛教に限る、そこで聖德太子は第二ケ條になると

篤く三寶を敬へ、

とお教へなされた、調和と云ふことは極て大事、其の調和と云ふものはどうして出來るかと云ふと、今申したやうな具合である、自分の胸の中の不調和を調和させるには、何によつて調和をさせる事が出來るかと言ふと、大變な大問題である、敎育家も政治家も皆頭を惱まして居る、マア政府の方の役人のする仕事を見ても夫等の消息が能く分る、以前は法律規則さへ拵へれば何んでも出來ると思うて居つた、內務省の役人は、道德がどんなものやら、宗教がどんなものやら、更に頭に置いて居なかつた、法律規則さへ拵へれば、自分達の思ふ通りに行くやうに思つて居つた、然るにさう遣つた處が中々行かない、幾ら規則を拵へても法律を拵へても、どうも行かない、そこで漸く氣が付いた、これでは行かぬ、矢張り德川時代に樂翁公が寬政の改革を遣られた、上杉鷹山公などが其の領分を治められた、あの邊から考へると、どうもあれが良い、所謂德政が良い、法

律だけの政治では可けない、どうしても一面道德を奬勵すると云ふことがなければ可けないと云ふことに氣が付いて來たものであるから、そこで其の方の側に大分力を入れかけて來た、さて夫れには何を持つて來たが宜からうか、孔子の敎へを持つて來ても、どうも力が無くなつて了つて居る、以前は孔子の敎へで行つたのであるが、モウ今日ではどうしても夫れでは可けない、何んか一つ今日の敎育の頭に浸み込む處の法はなからうかと考へて見たけれども、どうも思はしいものがない、まだ宗敎に氣が付かなかつた、矢張り樂翁公あたり鷹山公あたりの遺り方を考へた、そこで止むことを得ず二宮尊德先生を持ち出した、これは經濟と道德とを兼ねたもので、其の標本が二宮尊德先生であると云ふので、大いに所謂二宮宗を鼓吹した、ところがどうも夫れでも足らない、どうも二宮尊德ばかりでは可けない、そこで是れは、何んとか良い方法があらう、歐羅巴あたりはどんな具合で遣つて居るのであらうかと、其邊の視察に出掛けた、夫れから終には三敎會同と云ふやうなことが出來て來たのである、三敎會同は、今日の政府から言へば、あれは仕やうがないからと云ふのであらうが、我々から言ふと、うろたへた話であると思ふ、宗敎と云ふことになりやア、日本の國體にチャンと適合した、日本の國民道德を養成した處の經驗のある佛法がある、聖德太子が、篤敬三寶、此の佛法でなければ可かぬと、千三百年の昔にお示しになつて居る、チャンと決案が出來て居る、必ずしも外國の物を藉りて來んければならぬと云ふことはない、よく佛敎を信仰することになれば、國民の心はドコまでも調和させて行くことが出來ることであらうと思ふ、これは私が言ふ譯ではない、聖德太子がさうお言ひになつて居るのであるから、其の心持ちで佛敎家は力を盡さんければならないことでありまして、又佛敎を信ずる信徒の方々も、其の心

持ちを以て飽くまでも御盡力下さらんければならぬことであらうと思ひます。

扨て前申す如く調和と云ふことが大事である、衝突しないと云ふことが大切である、其の調和と云ふことは何から出來るか、ソコが六ケしい問題である、然るに聖德太子は、佛教でなければ調和は出來ぬと、斯う仰せられるのです、佛法の信仰でなくては、ドコまでも調和と云ふことは出來ないから、誰れも彼れも、佛法を篤く信ぜよと仰しやつたのが十七憲法の第二ケ條である。

篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり、卽ち四生の終歸、萬國の極宗、何れの世何れの人も是の法を貴ばざるはなし、人に尤惡鮮し、能く敎ふれば之れに從ふ、其れ三寶に歸するに非ずんば、何を以てか枉れるを直さんや。

第二ケ條は如此である、篤く三寶を敬へ、三寶を敬へば調和が出來る、其の三寶は何

んの事であるかと云ふと、佛法僧なり、佛と、佛のお說きなされた法と、其の法の通り修行する團體、夫れが僧である、僧とは和合と云ふことである、一人の坊主を僧と云ふのではない、今日僧と云ふと、頭を圓うして居れば皆僧と言うて居るけれども、僧と云ふことは和合と言ふことで、一人の坊さんを捉まへて僧とは言はぬ、三人以上組合うて、卽ち團體を拵へて、仲よく、所謂調和して修行をすると云ふ、其の團體が僧と云ふものである、此の三つは、供養すれば供養した者が福德を得ると云ふので寶と云ふ、詰る處、佛法僧と云ふ三寶は、分り易く言へば、卽ち佛法と云ふことなんです、篤く三寶を敬へと仰しやるのは、篤く佛法を敬へ、篤く佛敎を信ぜと仰しやると同じ意味なんです、『四生の終歸』四生と云ふのは四つ生れると書いてあるが、生れて來るのに四種ある、これは印度の說なんです、人間の如きは胎生と言ふ、生れる時から人間の姿で生れて來る、

夫れから卵生と言つて卵で生れて來る、夫れから濕生と言つて、濕り氣のある處に、蛆のわくやうに、生れて來るものがある、夫れから化生と云ふのがある、何もない處にフッと現はれて來ることがある、之れを印度に於て四生と云ふ、そこで四生と云ふことは、所謂『生きとし生けるもの』と云ふ程の意味なんである、終歸と云ふのは、トントの落ち付き處と云ふことである、生きとし生けるものゝトントの落付き處と云ふのは、佛法より外はないのである、『四生の終歸萬國の極宗』、世界の宗教の中、一番優れたる處の宗教である、夫れはどうしてそんな事が言へるのであるか、宗教として佛教程結構な宗教はない、佛教ほど完全な、佛教ほど道理の積んだ、基礎の堅固な宗教と云ふものは、恐らくドコを搜してもあるまいと思ふ、耶蘇教などを信ずる人は、私が考へて見ると、一つは佛教の方に因緣がないからのことであるけれども、要する處佛教と云ふものを知らないのである、耶蘇教に限らず神道を信ずる人でも、外の宗教に首をつッ込んで信ずる人は、佛法を知らないからのことである、其の人が佛法をよく聞きさへすれば佛法へ這入るのぢや、佛法の結構なる事を知らずに耶蘇教を聞くから、耶蘇教は結構だと思ふ、天理教を聞くから天理教が結構だと思ふ、其の耶蘇教や天理教以上の味はひのある佛教を知らぬからのことぢや、知つたならば、どだい比較にも何んにもなるもんぢやない、決して耶蘇教へ行く氣遣ひもなければ、神道へ行く氣遣もない、天理教へ行く氣遣ひもないと思ふ、其の證據には、外の宗教を信じて居つた人が、佛法を研究し始め、佛法を聞き始め、如何にも佛法の有難い貴いことが分つて、佛教になつて了うた人が、今日は隨分澤山ある、それから見ると全く外の宗教に據つて居る人は、佛法の有難い事を知らず、佛法の結構なることを知らないからである、ソコから言ふと我々は大變罪がある、佛法を

知らぬ人によく聞かせ、佛法の道理をよく心得させて置いたならば、決して外の宗教へ這入る氣遣ひはないのである、夫れで佛教の道理を能く聞かせて置かなんだ、佛教の義理をよく聞かせて置かなんだ處から、遂に佛教を知らずに外の宗教へ這入つて了ふやうなことになつたのである、卽ち佛法を弘める者が其の任務を盡さなかつたのである、實に申譯のない話である、彼奴は耶蘇教を信ずる、彼奴は詰らぬ宗教を信ずると、信ずる者を悪く言ふけれども、悪う言ふ譯はない、コチラが卽ち悪かつたのである、コチラが能う聞かせなんだのである、教へて置かなんだからして、遂に外の宗教に這入り、外の道の方へ行つて了つたのである、ソコを考へると、實に此の佛教の方に關係のあるものは、誠にどうも謝罪らんければならぬ話である、佛教を信ずる者が、主觀的に自分の上を考へたならば、實に申譯のない話である、自身の教導が行き屆かなんだ、其の結果遂に人をして詰らぬ宗教に入らしめた、間違つた道に入れて了うた、何れにしても申譯のない話である、けれども、又一面から考へて見ると、致方がないのである、何んぼ坊主だつて、坊主には違ひないけれども、さうドコからドコまでも皆悉く佛法の分るやうに聞かせると云ふことは到底出來ないことである、其邊から言へば、止むを得ぬ話とせんければならない、夫れは兎も角も、外の宗教へ入つて居る人も、一ト度佛法のいはれを聞くと、成程結構な教へだと云ふことが分る、外の宗教へ這入つて居るのは卽ち佛法を知らないからである、佛教ほど宗教として結構な宗教はない、是れ程完全な教へと云ふものはないのである、夫れで萬國の極宗なりと仰しやつた、そこで何れの世も何れの人も是の法を貴ばざるはなく、此の法を信ずれば『人に尤悪鮮し』人間に、ドコドコまでも悪いと云ふものはありはせぬ、これは儒教などでもさう云ふことを言ふ、朱子の言

葉であつたと思ふが『世に不是底の人なし』、悪い人間と云ふものはありはしない、コチラが悪うするのであると云ふ、夫りやァそんなものであらう、あの人間は悪い人間だと言ふけれども、ドコまでも悪いと云ふものではない、コチラの持ちかけやうが悪ければ、向ふも悪う出る、向ふの心の柔ぐやう、向ふの胸のやすまるやう、コチラから持ちかけて行くとになりやァ、どんな人間でもさうドコまで悪いものではない、人間としてドコ〳〵までも悪性なと云ふことはありはしない、夫れであるから、能く〳〵教へて行くことになりやァ、皆其の教へに隨うて、悪い者も善いものになり、不出來な者も出來るものになる。

然るところが、其の教へると云ふのはどう教へるのであるか、どう云ふ道理を教へるのであるか、『三寶に歸するに非ずんば、何を以てか枉れるを直さんや』、佛法を信仰させると云ふことに教へ込まんければ、枉つた根性をドコまでも直すと云ふことは出來ないのである、これが十七憲法の第二ケ條であります。

此の十七憲法の上からして窺うて見ると、聖德太子が佛法をお弘めなされた御精神は、前にも申した通り、之によつて、國民道德と云ふものを發達させて、夫れで此の國家を擁護しようと云ふお考へであつたのである、即ち此の佛法と云ふものを、現在國家の用に立つやうに、直ぐに間に合ふやうに扱うたのである、印度や支那に於ては、全くさう云ふ方の側がないと云ふ譯ぢやァない、偶にはありはしまするけれども、マァ概した上から言ふと、印度や支那の佛法には、佛法をさう云ふやうな具合に用ひると云ふことは極く尠いことである、夫れが日本に渡つて、日本人の手に這入り、即ち聖德太子のお手に這入ると云ふと、直ぐに日本の國家及個人の上に用に立つやうになつた、これが日

本人の特長と言うてよい處であらうと思ふ。

ところが三寶に歸すると云ふと、なぜ夫れが國家擁護になつて來るのであるかと申すと、山へ這入らんければならぬものである、谷底へすくまんければならぬものであると云ふことであつて見ると、どうしても今日の現在の用に立つものにすることは出來ぬ、國家を擁護すると云ふことは、どうしても出來ない、山へ這入り谷底へすくむと云ふことは、國家と離れる仕事である、夫れで以て國家を擁護すると云ふことは出來る譯はない、然るに三寶に歸すると云ふことは、商賣をして居りながら百姓をして居りながら其の儘出來るのである、卽ち社會の生活を離れずして、商賣人でも百姓でも、現在の生活の上に於て、その儘三寶に歸するることが出來る、夫れぢやから此の佛法で社會人民の道德を維持することが出來る、社會の人民が皆道德的になれば、諸佛菩薩諸天善神の冥

力加被を得ることが出來る、そこで篤敬三寶が卽ち國家を擁護する所のものになるのである、要する處、百姓をする者は百姓をしながら、商賣をする者は商賣をしながら、或は辨當を持つて通ふ者は通ひながら、夫れが皆私慾を離れ、自分勝手の考を離れて、其のものゝ眞理通りに遣ると云ふやうになれば、夫れが卽ち佛法に適つて來るのである、そこで商賣人は商賣人の眞理通りに商賣をし、百姓は百姓の眞理通りに百姓をし、辨當持つて通ふものは其の眞理通りに遣ると云ふことになりやァ、夫れが卽ち道德なんです、其の道德さへ發達をすれば、取りも直さず國家と云ふものが鞏固になつて來る譯なんです、そこで聖德太子のお手に這入ると云ふと、直ぐに所謂治生產業皆是實相、此の姿の儘で佛法の修行が出來ると云ふ處にお氣が付いたものだから、これで一切の人民の道德を發達させて、これで以て國家を擁護することが出來ると、斯う云ふ處から、佛法

を國家鎭護の道具になされて、直ぐに現在の上に間に合ふものにお扱ひなされることになつたのである。

第十　日本の佛教（四）

聖德太子弘教の外面形式及內的信仰

要する處、聖德太子は、佛教で國民の道德を發達させて、夫れを以て皇室を擁護し、國家を鞏固にせんと云ふお積りで佛教を弘通なされた。

ところで理窟の上ではなしに、實際の上では聖德太子は、どう云ふ具合に一體佛法をお弘めなされたのであるか、と云ふに、聖德太子は推古天皇の攝政の位にお就なされ、所謂在家の人、卽ち俗人で而も政治家である、其の政治家でありながら、其の政治家の服裝の上に、暇のあるときには、二十五條の袈裟をお掛けなされ、手には柄香爐をお持ちなされ、さうしてお經の講釋をなされると云ふ有樣であつたから、或る一面から云ふと僧侶のやうなものである、又他の一面になると天下の政治家である、御著なされる服も官服

である、そこで僧と俗とが一つになつて了つて居る、所謂非僧非俗なんである、親鸞聖人の仰しやつた非僧非俗と云ふことは、既に聖徳太子の上に現はれて居つたのである、そこで親鸞聖人が非僧非俗の姿をお現はしになつたのは、卽ち聖徳太子の風儀を自身の上にお移しなされたのである、親鸞聖人ばかりではない、眞宗一般の風儀が卽ち夫れなんです、眞宗と云ふ形は已に聖徳太子の時に始まつて居る、そこで眞宗では、どのお寺でも聖徳太子の像が懸けてある、あれは外のお宗旨にはない、眞宗だけのことである、夫れはなぜであるかと云ふと、眞宗の形は聖徳太子を移したのであるからである、聖徳太子其の儘を現はした形は卽ち眞宗の形である、そこで眞宗の坊さんは、眞の坊主ではないのである、親鸞聖人も坊主とは思つて居らせられなんだ、決して御自身は坊主と云ふお考へはなかつた、頭から非僧非俗と仰しやつた、愚禿釋親鸞と仰しやる位のことであるから、決して御自身は、本當の僧分であると云ふ了簡はなかつたのである、服裝の如きも僧分の服ではない、あの時分の僧侶の服と云ふものは、色衣のことなんである、然るに親鸞聖人は黑い法衣を著て黑い袈裟をお懸けなされた、あれは僧分の服ではない、早く言ふと居士服と云ふやうなもので、入道者は誰れでも著たものなんです、夫れで親鸞聖人は本式の坊主ではないのである、外の宗旨の人は無論坊主とは見て居らぬ、坊主ぢやないと云ふ、夫れぢやから元亨釋書の僧傳の中には載つて居らない、淨土建立章と云ふ、淨土門の事を詳しく書いた凝然の著書であるけれども、親鸞聖人の事は載つて居らない、なぜであるかと云ふと、無論今日の本願寺のやうな勢力はなく、極く小いものであつたのであるけれども、小さいばかりではない、親鸞の如きものは坊主ぢやないと見て居つたからである、親鸞聖人が夫れ程のことであるから、其の末寺の僧侶共は、

弟子とは謂はれやうけれども、僧侶と云ふ譯のものぢやァない、妻も持ち肉も食ふ、俗人と同じやうな姿をして居る、さうして人から招待されると云ふと、直ぐ法衣を著て出る、丁度聖德太子と同じ事である、平生は俗人の姿をして、必要に應じて暫くの間僧分の姿を身の上に現ずるのである、夫れが眞宗の風である、他宗の僧侶とは大變違ふのである、他宗のお人は皆本當の僧分と言はんければならぬ、眞宗の坊主は夫れだけの値打はない、是等は矢張り、世間と出世間と一つになつたのである、眞俗一つになつたのである、僧とも俗とも分らないと云ふのは、世間の法が卽ち佛法となり、佛法が卽ち世間の法となると云ふことを現はしたのであつて、世間を離れて佛法を修行するのではない、社會の生活をして居る其の上で卽ち佛法の修行をするのである、社會の生活と佛法の修行とは離れぬものであると言ふことを、姿の上に現はしたのである。

夫れから、そんなら仕事はどう云ふ仕事を爲されたかと云ふと、聖德太子は寺をお建てなされた、其の寺をお建てになる心持ちはどうであるかと云ふと、日本書紀の上に出て居る通り、『君親の恩みに報いんが爲に』お建てなされたのである、卽ち御恩報謝と云ふ、卽ち天子樣の御恩、自分の父母の御恩を報謝する爲に寺をお建てなされたのである、これは言葉を換へて言へば、矢張り鎭護國家の爲に寺をお建てなされたのである、其のお寺はどんなやうな仕組みであるかと云ふと、聖德太子のお建てなされたお寺が皆さうと云ふ譯ではないけれども、四天王寺の如きは、所謂四院から成立つて居る、敬田院、悲田院、施藥院、療病院、此の四つで組織せられて居る、敬田院と云ふのは、所謂篤敬三寶と云ふ佛樣を安置して、佛法を說いて聞かすと云ふ處、卽ち佛樣を御崇敬申す處なんです、恰度普通の寺のやうな具合である、これが世間出世間と云ふ方から言ふと、出

世間の方で、眞俗二諦から云ふと、眞諦門と云ふ方の側である、悲田院と云ふのは、卽ち慈善をする處である、貧窮なものを憐んで、貧窮なものを救ふと云ふ慈善をする役所なんである、卽ち今日の慈善會本部なんである、施藥院と云ふものは、藥を施す處、貧窮な者は病氣をしながら藥を買ふ錢がない、斯う云ふものであつて見ると、藥を服むことが出來ぬ爲に、到頭有る命も棄てんければならない、どうぞさう云ふものに藥を服ませて、健康體となつて、國家の爲に用の出來るものにして遣りたいと云ふ、斯う云ふ處から、病氣のものに藥を施す處である、療病院と云ふのは、卽ち今日の慈惠病院のやうなものである、無料治療をすると云ふ處、この三つだけは、眞俗と云ふ上で言ふと卽ち俗の方である、世間出世間と云ふ處では世間である、夫れで聖德太子の佛法のお弘め方は卽ち斯う云ふ譯なんである、一方では佛樣を御崇敬申し、或は其處でお經を讀み、佛の御法を說いて聞かせる、夫れから一方に於ては、慈善と施藥をする、慈善的の事業をして、貧民を救ひ病人を救ふと云ふ仕事、さう云ふ寺が卽ち眞俗一致したものである、全るで出世間的のものぢやァない、世間と出世間と一致した、眞諦と俗諦と一致して出來上つて居るのである、そこで一方に於ては佛の法からして人を道德に導き、一方は慈善をして貧窮なものを救ひ病人を救うて遣る、斯う云ふやうな佛法の弘め方と申さんければならぬ。

此のお寺の仕組の上から見ましても、聖德太子は佛法と云ふものを世間から離れたものとしてお扱ひなされぬ、佛法を直ぐに世間の上にお扱ひなされた、佛法を世間の上に扱ふ結果と云ふものはどうなるかと云ふと、今日一般の人民の道德は夫れから起つて來て、一般の人民の生產力と云ふものは夫れから增すことになる、病人が治つて健康體で

業務に服す、そこで直ぐに夫れが卽ち國家を擁護する處のものになつて來る、斯やうに人を道德に導き、貧窮な者を救ふと云ふことになれば、銘々の家に、神樣や佛樣の加護がソコに加はつて來ることになる、これは眼に見えぬことであるけれども、此の通り佛敎の上から人民を引立てゝ、眞直ぐな道に人心を導き、さうして難儀な者を救ひ、憐れな者を惠んで行くと云ふことになりやァ、神佛の冥加に適ふと云ふことになり、自然に神佛の加護力と云ふものが加はつて來る、早く申すと、さう云ふことをする國家は、佛がお護りなされ、神樣がお護りなさると云ふことになる、ソコから卽ち佛敎が直ぐに鎭護國家のものになつて來るのである。

然るに今日の佛敎と云ふものは、眞諦俗諦と離れたものゝやうになつて了うて居る、世間と出世間とは離れたものゝ樣になつて居る、段々と世間と遠ざかつて來て居るが、

それぢやから一向社會の間に合はぬものゝやうになつて了うた、これは矢張り聖德太子の本に戻つて、聖德太子が佛法をお弘めなされた如く、佛法を弘めると云ふことになりやァ、決して耶蘇敎に負けるやうなことになりはしない、マア近頃は少しはさうなつて來た、餘程佛敎と世間とが近付いて參りました、其邊は誠に結構なことである、乍併國民道德を佛敎で發達させると云ふ側は、近頃は甚だ尠い、夫れで今日に於ては、一方に自身の信仰を段々高め、一方には社會の仕事をすると共に、一方には一般人民の信仰を引き起して、其の信仰によつて國民道德を段々發達させると云ふ處に力を盡さんければならぬ譯であるのです。

そんなら其の佛法で人民の道德を惹き起すと云ふことは、どう云ふ處からさう云ふことが出來るやうになるのであるかと申すと、前にも申した通り、トントの押し詰つた

處を申すと、篤敬三寶と云ふことは、如來樣がホンマに有難うなると云ふことでなければ篤敬三寶と言ふことは出來ぬ、誰れも彼れも如來樣を信じ、如來樣が本當に有難うなると云ふやうになつて來さへすれば、自身の胸の中のアクザモクザのがらくたがなくなつて、何から何に至るまで、御恩報謝と云ふことになつて來る、所謂君親の恩みに報いんが爲と云ふことが、事實に其處に現はれて來ることになる、夫れぢやからして、此の佛法をホンマに信ずる　如來樣がホンマに有難うなると云ふことになりやァ、其處に道德と云ふものが起つて參らんければならない、其道德が卽ち佛教の上の道德で、平等卽差別、差別卽平等、天子樣の御恩が有難い、自身の親の御恩が有難い、君臣の御恩が有難い處から、國を守ると云ふやうなとが出來て來るやうになるのである、夫れが卽ち佛教の上からして現はれて來る處の道德であるのである。

そこで聖德太子は一體どう云ふ風に如來樣が有難かつたのであるか、一ト口に言ふと、聖德太子の御信念はどんな御信念であつたのであるか、と申すと、これはどうも材料が尠ないから、キッパリ言うて見ることは出來ないことであるやうであるけれども、乍併色々な材料を集めて見ると、矢張り聖德太子の御信仰は往生淨土と云ふことであるらしい、親鸞聖人のお書きになつた太子和讃の上で見ると、立派に他力信仰を持つてお在でになつた樣である、外の書物ではさう云ふことはキッパリ分らない、人によると、聖德太子は淨土思想がなかつたと云ふ人も隨分ある、そんなことはない筈ぢやらうと思つて、段々色々な事を調べて見たのであるけれども、餘り明確な材料は得られぬ、併しどうも矢張り淨土思想があつたらしい、後生はどうぞ淨土へ往生させて頂きたいと云ふ御信仰であつたらしい、太子のお言葉の上にはそんなことはドコにもない、ないけ

れども一つ二つはある、御承知でもありませうが、

法隆寺の金堂の中にある名高いお釈迦様の三尊佛、あの三尊佛は、聖徳太子がお薨れなさると云ふと、其のお子様が記念の爲に御建立になつた所のもので、其の譯柄を銘にお彫りになつて居る、其の銘の中に明かに、

『往登二淨土一、早昇二妙果一』

と云ふことがある、聖徳太子にさう云ふ御信仰が無ければ、其のお子様がさう云ふことをお書きなさる譯はない、矢張り聖徳太子に御信仰があつたからして、後にお残りなされたお子様も、今頃は父君は淨土に往生なされてあるぢやらうと、御推察になつてお書きなされたものであらう。

これが一つの證據である、

夫れからモウ一つを申すと、中宮寺と云ふお寺がある、法隆寺に極く接近した寺である、あの寺に天壽國の曼陀羅と云ふものが残つて居る、この天壽國と云ふものは是まで聞いたこともない名である、さうして其中にどんなものがあるか、べらべらに破れて了つて、その一部分だけが残つて居るのであるが、夫れで見ると、誠に變なものである、實に何んとも譯の分らぬやうなもので、マア山水と云ふやうなものでありますが、陸もあれば川もあり、山もあれば木もあり、人物もある、さうして圓い龜の甲見たやうなものが四十八ある、其の一つの龜の甲の中に四字づゝ字が書いてある、夫れが曼陀羅の銘である、一寸見た處では何にやら分らぬ、分らぬが天壽國の曼陀羅と稱せられて居る、天壽國と云ふものはどうしても無量壽國としか解釋が出來ぬ、之れは私が言ふばかりではない、昔の書物にも、天壽國は無量壽國なりと書いてある、

卽ち極樂の曼陀羅なんである、其の銘を讀んで見るとこれが又、聖德太子の御遺族の方が三韓から來た畫師に下畫を作らせて、さうして織り上げたもので、聖德太子追善の爲と云ふのである、卽ち、御薨なされた王皇太子さんは、今頃はどの邊にお在でなさるであらう、どう云ふ處にお在でなさるであらう、豫て淨土の往生をお願ひなされた方であるから、定めて今頃は斯う云ふ結構なお淨土にお在でなさるであらうと、云ふ所から、御想像を爲されてお作りなされたのである、あの時分には曼陀羅と云ふものは傳はつて居らない、夫れぢやから唯自身の想像を描いただけのことである、夫れで極樂と云ふことが分らぬから、極樂と云ふことを表する爲に龜の甲を四十八個置いた、龜の甲と云ふものは、鶴は千年龜は萬年と云つて、限りなき壽命を保つものが龜であるから、龜を以て無量壽を現はし、四十八個を描いて四十八願を現はしたのであ

る、これは私の解釋であるが、兎に角其の銘の中には、明かに淨土へ往生すると云ふことがあつたやうに思ふ、

『我大王所レ告、世間皆假、唯佛是眞、玩二味其法一、謂我大王、應レ生二於天壽國之中一、而彼國之形、眼所レ叵レ看、悕因二圖像一、欲レ觀二大王往生之狀一』

と云ふ言葉もあつた、世間は皆迷ひの影である、誰れも彼れもほんまのものはありはしない、唯だ本當のものと云ふのは佛樣である、卽ち我々の本當に賴りになり、我々の力になつて、少しも間違ひのないのは佛より外はない、斯う云ふお言葉があつたやうに思ふ、これから見ても、天壽國はどうしても無量壽國ぢやと云ふことが分る、で佛の國へ往生なされた、其の佛の國の模樣をお拵へになつたものである。

斯う云ふ風なものを一つ二つ取り出して見ますると、どうも矢張り、聖德太子は親鸞

聖人の仰せられた如く、其のトントの御信仰は、矢張り往生淨土と云ふ御信仰であつたやうに思はれる、又聖德太子の御講釋になつた勝鬘經と云ふお經に依りますると、どうしても往生淨土と云ふことになつて來んければならない、篤敬三寶と云ふことは勝鬘經にある、之れを押し詰めるとどうしても往生淨土と云ふことになつて來んければならぬ、其の話は長くなりますから後に讓ることにする。

夫れで御信仰は矢張り往生淨土、往生淨土と云ふ處からして御恩報謝と云ふ處へ出て、御恩報謝と云ふ處からして今日の現在の上の道德と云ふものを立派に發達させる、其の道德が立派に發達すれば、取りも直さず夫れが卽ち國家を擁護することになる、斯う云ふお考へであつたことであらうと思ひます、然るに世間の學者の中には、聖德太子の信仰は、觀音樣である、其の證據には、太子の御本尊は觀音であつて、法隆寺夢殿の御本尊も四天王寺の御本尊も皆御自刻の觀音の像ぢや、是が何よりの證據であると云ふ、是は一應尤な說である、決して否定することは出來ぬ、併し乍ら觀音と彌陀佛とは密敎の方で云ふと、一體である、彌陀佛の因位を觀音と云ひ、觀音の果位を阿彌陀佛と云ふ、故に阿彌陀佛を觀自在王如來とも申すのである、又淨土門では、阿彌陀佛の慈悲の德が觀音で、智惠の德が勢至菩薩、三尊は一體とす、善導大師の御語にも「頂戴彌陀冠中住」とある觀音は頭に冠を戴いて其中に阿彌陀佛が御立になつてある、是が觀音の本體は阿彌陀佛であることを表現したものである、偖て觀音の慈悲と云ふは、どう云ふものかと申すに、所謂三十三身普門示現して一切衆生を方便誘引し遂に彌陀の信仰に入らしめんとするが觀音の慈慈である、親鸞聖人は、聖德太子は其御本地より云へば觀音樣ぢやとなされる、そこで和讃に、

『聖德皇のアワレミテ、佛智不思議の誓願に、スヽメイレシメタマヒテゾ、住正定聚の身となれる、聖德皇のオアハレミニ、護持養育タエズシテ、如來二種の回向ニ、スヽメイレシメオハシマス』

と仰せられた、此の如き譯であれば、觀音信仰の終極は彌陀の信仰になるのである、そこで聖德太子の信仰は表面觀音に在る樣であるけれども、その終極の處に達せられてあるのであるから、やはり彌陀の信仰卽ち他力の御信仰であらせられたこと、思はれる、觀音を本尊となされたのは、御自身の本地を客觀的に御出しなされたので、その精神は冠中の彌陀に在るのであると私は窺ふことである。

第十一　日本の佛教（五）

聖德太子講說の經典及其內容

扨聖德太子のお弘めになつた所の佛法の內容はどう云ふものであつたか、マア早く申すと云ふと、天台宗のやうな敎理か、華嚴宗のやうな敎理か、どの樣なる敎理をお說きになつたものであるか如何と申すに、聖德太子の三經の義疏と云ふものがある、あれで窺ふより外はない、前にも申しました通り、政務をお執りになる御暇に、官服の上に廿五條の袈裟を掛け、お經の御講釋を遊ばされた、其の御講釋を遊ばされたお經はどう云ふお經であつたかと云ふと、三つのお經を選んで御講釋になつた、其の第一が勝鬘經である、勝鬘經の御講釋をなされると共に、其の御講釋の御手控へと申しても宜いのでありますが、所謂講錄をお書きになつた、夫れを勝鬘經義疏と云ふ、夫れから維摩

經の御講釋があつて、其の義疏がある、夫れからして法華經の御講釋があつた、これにも義疏がある、之れを三經の義疏と云ふ、日本の佛教の著述としては一番古いものである、人によつては、夫れは太子のお書きなされたものと云ふことは實際分らぬぢやないかと云ふ人もあるけれども、これはどうも、太子と見るより外見やうはあるまいと思ふ、漢文で立派に書いてあるのであつて、一寸見ると支那人が書いたやうにも見えるけれども、能く調べて見ると、非常に和習がある、日本人の習癖がある、支那人の書いたものではない、夫れから内容に就て詳しく調べて見ると、此の三つのお經の註釋は、支那の光宅寺の法雲と云ふ人の書かれた註釋を土臺として書かれたのである、其の法雲と云ふのは、宗旨で申すと涅槃宗の人である、これは天台宗のまだ起らぬ先きにあつた宗旨で、其の宗旨の中で法雲と云ふのは極く有名な人である、其の人の直弟ではありますまいけれども、其の系統を受けて居る人が所謂恵慈禪師である、禪師は高麗の人で、高麗から日本へ來た、其に就て聖德太子は佛教をお學びになつたのである、卽ち聖德太子の御師匠さんであります、此の外に禁聽と云ふ人がある、此の人は元亨釋書には三論宗とありまするけれども、決して三論宗ではない、矢張り光宅寺の法雲と云ふ涅槃宗の人の教理を受けて居る人であるらしい、其の光宅寺の法雲と云ふ人の法華經の註釋がある、又維摩經の註釋もある、夫れを太子が御覽なされたものに違ひない、さうして夫れを土臺として聖德太子は三經の註釋をお書きなされたのである、聖德太子以後になると、モウ、悉く向ふから來る人は三論宗の人ばかりで、涅槃宗の人と云ふものは其の後は誰れも來ない、夫れから考へて見ると、三經の義疏と云ふものは、聖德太子でなければなるまいと思ふ、聖德太子の後に出來たならば、涅槃宗の教理を受ける譯はないのである、必

ず三論宗か法相宗でなければならぬ。

ところが此の三經の義疏の内容は今申す通り、教理の上から申すと涅槃宗の教理である、即ち光宅寺の法雲の註釋を土臺にして書き現はされたもので、聖德太子より後に出來たものではない、後に出來たものでなければ、聖德太子と見るより外はないのである文章が餘り立派過ぎると云ふ人があるけれども、聖德太子の文章は中々立派なんである十七憲法の如きが即ち夫れである、だから此の三經の義疏は聖德太子の御親撰と見て差支へないものと思ふのです、これが日本では佛教の著作としては一番最初のものと申しても良いのである、これまで日本人の書いたもので支那へ行つて、支那人が註釋を書いたと云ふのは外にはないが、此の聖德太子の義疏だけは、支那へ行つて支那人が夫れに註釋を書いた、これは珍らしいことである、併し三經の義疏悉くと云ふことではありませんけれども、勝鬘經の義疏の註釋を、支那人の明空と云ふ人が書いて居る、恐らく此の外に日本人の書いたものに支那人の註釋をしたものはあるまいと思ふ、幸ひに斯う云ふ親撰の御著述が殘つて居るのでありますからして、太子の佛教の内容、即ち太子のお說きになつた處の佛教の教理が分ることになるのである。

其の教理と申した處が、微細な處を話をする遑はないのでありますが、併しお經の上だけで大體の話が分ることであります、即ち聖德太子のお弘めなさる佛教の内容は一體どう云ふものであるか、と申すと、即ち法華經なんである、法華經をお弘めなされた、法華經の中にお說きなされた處の教理によつて佛法をお弘めなされたのである、其の法華經と云ふお經は、宗旨々々で種々の見やうが違ふが、聖德太子は一體法華經をどう云ふやうに御覽なされてあるかと云ふと、即ち法華經の義疏の一番初めに仰しやつてあり

まする

『此の妙法蓮華經は、蓋し是總て萬善を取て合して一因とするの寶典なり』

卽ちありと有らゆる善根功德を悉く一乘と開會なされたのである、一乘と云ふのは佛になる法、有らゆる善根功德悉く皆佛になる所の法であると開會なされたのが妙法蓮華經であると、斯う仰せられたのである、ところが有らゆる善根功德と云ふのはどんなものであるかと云ふと、法華經の當面で申すと云ふと、聲聞の修行であるとか、緣覺の修行であるとか、其の他有らゆる菩薩力の御修行と云ふものを、悉く一乘の妙法であると開會なされて了うたのである、詰り言ふと、五十年の間色々と法を說き分けて來たけれども、其の說き分けたものは別なものではない、皆悉く佛になる法より外はないのであると、開會遊ばされたのが法華經の御說法である、お經の當面ではさう云ふ風であるけれども、强ち聲聞ばかりではなく、緣覺の修行ばかりが一乘法ではない、夫れより以下の善根功德も、悉く一乘の妙法と云ふことにならんければならない、夫れを押し擴めて來ると、夫れより以下の善根功德と云ふものはどんなものであるかと云ふと、今日の倫理道德も矢張り善根功德である、善根功德と云ふと、貧民に金を遣つたり、乞食に物を遣ることのみのやうに思ふものもあるが、成程夫れも善根功德と言へよう、昔流の者にはさう云ふ考への者もあるやうであるが、そんな狹いものではない、親によく事へて孝行すると云ふのも善根功德、君に仕へて忠義を盡すと云ふことも善根功德、社會事業に骨折つて社會に貢獻すると云ふことも卽ち善根功德、慈善の事業をして貧乏な者を救ふと云ふことも善根功德、商賣するのに、商賣の眞理通りに商賣して行けば夫れが善根功德、自分の利欲をする爲に商賣をすると云ふのは善根とは言へぬが、社會の仕事

として、國家の爲の仕事としてする心持で商賣をすれば、其の商賣は誠に綺麗な商賣百姓も其の通り、其の道の通り、其の道理の通りに行くことになれば、夫れが卽ち善根功德と言へる譯である、有らゆる總ての善根功德が、其の儘卽ち佛法であるぞよと、斯うお說きなされたのである、今日の此の生活の其の儘が卽ち佛法であるぞと開會を爲されたことになる、からして佛は一番終ひの處に『治生產業不背實相』とお說きなされた、要するに、佛法と云ふものは治生產業、今日のお互ひの姿其の儘が佛法であると云ふのである、そんなら誰れでも今日の姿其の儘が佛法と云ふことが言へるかと云ふと、そんな都合には行かぬ、今日一般の人間が遣つて居る仕事と云ふものは、其の仕事の眞理に準じて遣つて居るものは甚だ尠い、これは殆んどない、商賣するのはどう云ふ心持であるかと云ふと、金を儲けたいと云ふ考へ、何んの爲に錢を儲けるかと云ふと、自身の慾

の爲めなんである、百姓をするのもさうである、何をするのも總て皆一ト口に言へば、慾と云ふことが土臺となつて遣つて居る、自己と云ふものを中心として總ての事を遣つて居るのである、さう云ふものが其のまゝ佛法ぢやと云ふ都合には行かない、イヤ我々はそんなことはない、我々は國の爲を思うて爲るのである、社會の爲を思うて爲るのであると、斯う云ふ人が隨分あるのであるけれども、夫れでも自身が、能く自身の胸の中を探つて見たならば、甚だ怪しいのである、決して今日の人間が、心底からして國の爲ぢや、社會の爲ぢやと思うて働いて居る者はありはしない、必ず自身の慾と云ふものが土臺になる、これは凡夫として免れぬ話である、そこで善導大師は『雜毒の善』と仰せられた、何んぼ善根と稱しても、其の善根はどんなものであるかと云ふと、毒の雜つた善根であると云ふ、成程毒が雜つて居るからして、或る場合になるとその中に含で居る

所の毒が吹出て來る、そこで立派な仕事でありながら、世間に迷惑を掛たり、人に損害をさせたりせんければならないやうなことになつて來る、あれは毒があるからである、毒のないやうにせんければならぬ、今日の人のする仕事と云ふものは、心のトントの底を叩いて見りやァ、オレと云ふことが中心になつて居らぬものは決してありはしない、夫れをさうぢやないと思うてあるのは大變間違つた話、自分が自分を知らないのである近頃は僞善が大變行はれて來た、表向き大變善根らしい事をする、腹の底から遣るんぢやァない、或る爲に仕ようと云ふので善根をすると云ふのが多い、表から見ると大變立派な事をするやうであるけれども、決して心の底は立派でも何んでもない、僞善である、其の人自身が腹の底を顧みて、往々夫れが爲に非常に煩悶する人がある、ツイ夫れが爲に佛教へ這入ると云ふ人も中にはある。

先達て私は、復聽きに聞いた話で直接ではありませんけれども、東京の或處で眞宗の人が說教をした、すると其處へ或る人が詣つて居つた、說教が濟んだ後に、其の說教をした人の處へ來て、非常に懺悔して禮を言ふ、夫れはどう云ふことであるかと云ふと、其の人の言ふには『今日は誠にどうも有難いことであつた、實は私は耶蘇教の牧師であつた、教會を持つて、日曜毎に其の教會で說教を致して居つた、其の說教はどう云ふ說教であるかと云ふと、御承知でありませうが、耶蘇教の方では卽ち正義になれ、悔い改めよと申すのである、夫れで私共も、教會で平生說教を致して居るのは、其の事を熱心に述べて居つたのである、眞實に悔い改めたものは天國へ行くことが出來るけれども、不正義のものは天國へ生れることは出來ない、夫れで正義でなければならないと云ふことを、八釜しく說教を致した、初めの間は何氣付かずに熱心に說教して

居りましたが、フツと自身の心の中を眺めました時に、イツも自身が説教をして居る事と、自身の實行して居る事とは宛るで眞反對であると云ふことに氣が付いた、悔い改めよ悔い改めよと、人には八釜しく言うて居るが、果して自身が本當に悔い改めて居るかと云ふと、本當に悔い改めては居らない、時々悔い改めるやうな心も起らんでもありませんけれども、これはホンの上面だけで、心底から眞に悔い改めて居るかと云ふと、決して悔い改めては居りません、正義であるかと云ふと、自身が平生する事は決して正義になつて居らない、矢張り不正ばかりが多い、全るで私は人に向うて嘘を言うて居る、人を瞞して居る、人を瞞して居るのはまだ宜しいけれども、自分を瞞して居る、自分を瞞して居るのはまだ宜いが、神を私は瞞して居るのである、神を私は僞つて居るのである、これは實に申譯がない、神へ對して申譯がない、又參詣をする人々に對しても申譯がないのである、これではならぬ、自身が眞に悔い改めて、さうして總ての事を正義に基いて遣らんければならないと、斯う思ひまして、其の後は、自身が一層、自身の心の底に氣を付けて、勵んで見たのでございます、ところが、自身が氣を付て見れば見る程、胸の中に變な心が起つて參りました、深く考へれば考へる程益々眞に悔い改められない心が出て來るのであります、正義にならうと思へば思ふ程正義にならられない、どれ程努めて見ても、これなら宜からうと云ふ心が出て來ない、夫れで、こりやァ叶はぬ、こりやァどんなに骨折つた處が、到底我々が本當に悔い改めることは出來ない、本當に正義になることは出來ない、正義になる事が出來ないとして見りやァ、所詮のないことである、悔い改めやうと言つて骨折つた處が、到底悔い改めることが出來ないとなつて見りやァ、出來ないことを遣るのは馬鹿な事で

ある、寧そ止めませうと、斯う云ふ心持ちになつて、ツイ私は、夫れで說教を止めました、牧師も止めて了うた、並の人間になりました、出來ぬものなら、さう努めて汲々せずとも、矢張り人間の食ふ物を食ひ、飲む物を飲むが宜いと、斯う云ふやうな考へになつて、食ひたい物を食ひ飲みたい物を飲むやうになつて、到頭早く申すと墮落をして了うた、夫れで近頃はツイ此の近邊の家の座敷を借りて、極く詰らない生活を致して居ることでありまする、ところが今日はどう云ふ譯でありましたか、朝起きて朝飯を喫べると家の主人が私の間へ參りまして、時に今日はドコソコに說教があるから一緒に詣りませんかと云うて誘ひに參りました、夫れで其の時は、說教……夫れは詰らぬ、己れも嘘を云うた、坊主も嘘を言ふに違ひない、そんなものは聽く値打はあるまいと、斯うは思ひましたが、折角家の主人が誘うて呉れたものを、夫れを

無情に斷ると云ふのも義理知らずの話である、人情のない話である、折角親切に誘うて呉れたのであるから、マア行つて見ようと云ふ位の考へで、耶蘇教の說教は自身が遣つたけれども、佛教の方の說教はまだ聽いた事がない、佛教の說教はどんなものか一遍聽いて見ようと、斯う云ふ心が起つて、そこで主人と一緒に今朝アナタのお說教へ參詣いたしました、實はアナタの御說教を冷かしに參りました、ところが實に今日は有難いことでございました、說教を承つて見れば、其の悔い改める事の出來ない、眞の正義になられない、其の者を救ふ佛のお慈悲であるぞと、こんな有難いことはありません、これでなければ私は助からぬ、悔い改めて正義にならなければ天國へは生れられぬと云ふやうな、神の方から注文が出て居つては、到底私は助からぬ、私は遣て見たけれども可けない、可けないとして見れば私共は助かる法がない、ところが今

の御說教を承つて見れば、其の悔い改める事の出來ない、正義になる事の出來ない、所謂罪業深重の輩を、其の儘なりでお救ひ下さるのが阿彌陀樣のお慈悲であると云ふことである、これでなければ助からぬ、有難いことであつた』と非常に喜んだと云ふことであります、夫れからして後に、度々其の說教者の處へ來て法話を承り、今日も矢張り夫れを續けて居ると云ふやうな話を聞いたことでありまするが、斯う云ふ人は澤山ある。

先達ても廣島で、夫れに似寄つたことを聞きました。

私が此の話をしますると、其處に說教をする人が居られまして、『イヤ夫れは實に其の通りであります、先達て私の知つて居る者の上でも、恰度夫れと同樣なことがありました、私は何んにも知らずに、善導大師の

不レ得ニ外現ニ賢善精進之相一、內懷ニ虛假一、貪瞋邪僞、奸詐百端、

と云ふことに就て話をした、あれは善導大師の思召しの上で頂くと、外に賢善精進の相を現はして、內に虛假を懷くことを得ざれ、卽ち內外相應ぜんければならぬと云ふ意味合である、夫れを親鸞聖人は、外に賢善精進の相を現はすことを得ざれ、內に虛假を懷けばなりと、斯う點を付け變へてお示しになつた、この意味合を言ひ擴げて段々と話を致した處が、夫れで非常に耶蘇敎の人が感心して、夫れからスッカリ佛敎になつて了つた、自身の心の中には虛假を懷きながら、外に賢善精進の相を現して居つた、自分の心は淺間しいものでありながら、如何にも慈善家らしい、如何にも社會の仕事を立派にするものらしい、國や社會の事を眞に心に掛けて居るらしく表に裝うて居つた、が內實は決してさうではない、汚れた心を持つて居りながら、表向きだ

け清淨な風をして居つた、所謂僞善を遣つて居つた、これは實に詰らぬことであると云ふ處から、眞宗の敎へに入つたと云ふことが、現在此の間ありました』と云ふ話がありました。

我々は惡い事はしない、と言ふ人があるけれども、夫れは途轍もない浮いた考へで所謂己を知らざる人である、此邊にはないか知らぬが、よく世間にはあるもので、地獄が有るか無いか知らぬけれども、私共は有つても無くても一向心配はない、私は惡い事をしたことがない、惡い事をしない者が地獄へ行く譯はない、我々はそんな惡人ではないと、言ふ者が隨分ある、立派な學者で、書物にまでそんな事を書いて居る者もあるが、夫れは誠に浮いた考へである、法律と云ふものを楯に取つて言うて見れば、夫れやア惡人ぢやないかも知れぬけれども、本當の道德と云ふ側から言つたならば、自身と云ふものは、決して天に愧ぢず地に愧ぢずと云ふやうな立派なものではないのである、自身でよく考へて見たら、心の底に惡のないと云ふ者は殆どあるまいと思ふ、ぢやからして、世間卽佛法ぢやと言うて氣張つた處が、決して此の儘が佛法ぢやと云ふことには中々行かない、で治生産業皆是實相と云うても、此の心の垢を取つて了はんければ實相と云ふことは出來ぬ、法華經には三軌と云ふものがある、三軌と云ふものは、衣座室の三軌と言つて

著二忍辱衣一
坐二空座一
入二慈悲室一

文字は少し違ふかも知れないが、意味は斯う云ふ風であつた、忍辱の衣を著て、空の座に坐り、慈悲の室に入ると云ふ、之れを三軌と云ふ、三の規則である、此の三つの規則

を以て遣つて行かなければ、法華經の精神には適はぬものであると云ふ、慈悲と忍辱と空と云ふもの、空と云ふものは、極く淺近な處で言ふと、所謂私慾のなくなつたことである、難儀したものを不愍に思ひ、困窮したものを救はうと思ふのは、卽ち慈悲である、忍辱と云ふのは忍耐の事、辱めを忍ぶと云ふのは、人間の辱めと云ふのはどんなものであるかと云ふと、我々は天然界よりも始終辱めを受けて居り、又人事界に於ても始終辱めを受けて居る、天然界の辱めと云ふのは、例へば夏になると、我々は强き太陽の光りを浴せ掛けられる、又冬になると、此邊では大雪の辱めを受ける、又人事界の上から申すと、有らゆる方面から我々は色々な辱めを受ける、夫れのみならず、精神界の方に於ても、種々樣々な煩悶を起して恥辱を受けて居る、夫れを忍んで行くのが、卽ち忍耐である、其の忍耐が出來れば卽ち同情すると云ふことが出來るもので、卽ち菩薩と云ふのは、自身がどのやうな辛い目に遇はうとも、どのやうな目に遇はうとも、自身の上は構はないで、人を救ひたい、世を救ひたいと云ふのが菩薩の遣り方である、夫れは卽ち忍耐から出て來る、併し夫等は竝の人間で行くことぢやありませんけれども、極く單純な所、淺薄な處を言うて見れば、卽ち自分と云ふ考へを頭になくして、人に同情を寄せて行く、自身の身の上を儉約して、成るべく自身の事柄に就ては忍耐して、人に同情をする、夫れが慈悲忍辱である、夫れから空と云ふのは、奥深い處で申せば中々我々の出來る處ではありませんけれども、極く淺墓な分り易い處で言ふと、この胸の中をからにすることなんである、モウ一つ言ひ換へて見れば、自身の慾をスッカリ無くすると云ふことが空である、モウ一つ分り易く言ふと、我利々々根性がなくなつて了うたのが空なんである、我利々々根性がなくなつて、自身の上はドコまでも忍耐して、人に

向つてはドコまでも同情を寄せて行くと云ふことなんである。

そこで此の三軌に合して行くことになれば、幾らか世間即佛法と云ふことになる、純粹なものには迚も成らぬけれども、自身の胸の中の我利々々根性をなくして、さうして自身の辛い難儀と云ふことを外にして、世の爲にし國の爲にし、日本で言へば天子樣に向つて御奉公申す、斯う言ふやうにして行くことが出來れば、卽ち其の仕事其の儘が矢張り此の佛法の道理に適ふと云ふやうな譯になつて來る。

そこで法華經と云ふものは、頓と押し詰めて了ふと空と云ふ一字になる、空と云ふが、卽ち法華經の上の土臺なんである、其の空と云ふものはどんなものであるかと云ふと、今申す我利々々根性が無くなつて了うて、日本人であつて見れば、天子樣の爲に、日本の國家の爲に同胞の爲に盡す、自身の慾を離れ、自身の情ない淺間しい心を離れ、

親鸞聖人の仰の如く『朝家の御爲め國民の爲め』『世の中安穩なれ』と、思ひ、卽ちどうぞ皇室の御盛んになるやう、どうぞ此の日本の國の發達するやうにと、斯う云ふ心掛けを以て總べての事をして行くと云ふのが卽ち法華經の精神である。

此の法華經の精神を體得して、其の手本をお示しなされたのが維摩である、卽ち維摩と云ふ人はどう云ふ人であるかと云ふと、これは坊主ではない、坊主でなくて佛法を深く悟つて、菩薩の行を行じて居つた人である、卽ち自身を中心として仕事をすると云ふ考へがなくなつて、所謂空と云ふものになつて、どうぞ一切の衆生が救ひたいと云ふ心になつた人である、此の人が病氣に罹られたとき、『我病は一切衆生の病より起る』と、卽ちわしの病ひは、一切衆生が病氣に罹つて居るから、夫れで斯う云ふ病氣になつたのであると言はしやつたと云ふ、卽ち此の世界を以て自身の身とし、一切衆生の心を以て自

身の心として居つたのである、聖德太子の義疏には、

維摩詰者、乃是已登二正覺一之大聖也、乃至大悲無レ息、志存二益物一、形同二世俗居士一、處宅二毗耶村落一

と云うてある、どうぞ一切の衆生を救ひたいと云ふのが維摩の精神である、維摩經は、餘程面白いお經であるが長い話になるから略して置きますが、卽ち法華經の精神を男子が能く體して行く有樣をお示しになつたのが維摩經である。

夫れから法華經の精神を女が能く體して實行して行く有樣をお示しなされたのが勝鬘經である、日本の女は皆此の勝鬘經の如くにありたいと云ふ聖德太子の御精神である、勝鬘夫人と云ふお方はどう云ふお方であるかと云ふと、波斯匿王と云ふ王樣のお娘樣で、子供の時には能く兩親に事へて孝行を盡し、年頃になつて阿蹰闍國友稱王の夫人になられては能く其の夫に事へ、老いては其の子に從ふと云ふやうに、所謂三從の道を能く盡した人である。聖德太子の義疏には、

勝鬘者本是不可思議、何知如來分身、或是法雲大士、但遠照二蹰闍之機宜一、以二女質一爲化、所以初則生二於舍衞國一、王盡二孝養之道一、中則爲二阿蹰闍友稱夫人一、顯二三從之禮一、終則影二響釋迦一、共弘二摩訶衍之道一、

と云うてある、今日の新らしい女などとは大變違ふ、古い女か知れないけれども、女の女たる道を能く守つて、晩年には深く佛法に御歸依なされたのである、さうして十大受を述べて、どうぞ斯うありたいものであると云ふことをお願ひなされた、十大受と云ふものはどう云ふことであるかと云ふと、一ト口に申すと、女根性を止めて菩薩の行をしたいと云ふ、女と云ふものはどんなものかと云ふと、慾の深いものである、又嫉妬心

の強いものである、さう云ふ慾の深い心を止め、嫉妬心と云ふやうな淺間しい心をスッカリ除けて了うて、どうぞ此の世の中の人を救ひたいものであると云ふ願ひをお立てなされた、これが卽ち女たるべきものゝ手本である、この日本の女も、此の通りにならなければならないと云ふ思召しで聖德太子は之れをお示しなされたのである。

扨勝鬘夫人の十大受と云ふは、卽ち自身の御領解なされた事を十に分けてお述べになつたと云ふ意味合なんである、卽ち釋尊の敎へによつて、自身の心の中に受納して、どうぞ是れから斯やうにありたいと云ふことを述べられたのである、其の十大受と云ふのはどう云ふ事であるかと云ふと、第一に、

所受の戒に於て犯心を起さず

釋尊から受けた所の戒法に於て夫れを犯す心の起らぬやうにしたい、取りも直さず、受けた處の戒法を、一生涯所ではない佛になるまで犯すやうなことのないやうに致しませうと云ふのである、卽ち佛法に於て定められた掟を少しも犯さぬやうに致したいと云ふことである、第二に、

諸の尊長に於て慢心を起さず

尊長は卽ち目上のもの、目上の者に對して傲慢の心を起さぬやうに致したい、婦人と云ふものは表面から見ると大變謙遜らしいものであるけれども、心の中に立入つて見ると、存外に此の慢心のあるものである、さう云ふことは、或る場合によると、男子よりもまだ甚しい、人を何とも思はぬやうな横著な心が隨分ある、さう云ふ横著な心を起さないやうに致したい、第三に、

諸の衆生に於て恚心を起さず

恚心と云ふは瞋恚の心、これも女に比較的多いものである、時によると中々男子も恐る
る程甚しいことがある、所謂女根性、夫れで、一切の衆生に於て瞋恚の心をどうぞ
起さぬやうに致したい、たとひ向ふからどのやうな仕向けをして來ようとも、どのやう
な扱ひをして來ようとも、夫等に對して瞋恚の心を起すやうなことのないやうに致した
いと云ふこと、第四に、

他の身色及び外の衆具に於て嫉心を起さず

他の身色と云ふのは、自分より外の人の軀の事なんである、即ち他の人が大變縹致が良
いとか、大變物が出來るとか、斯う云ふことになると、女と云ふものは嫉妬心を起す、
中々其の嫉妬心と云ふものは竝の嫉心ではない、甚しきに至ると、憎いと云ふ處まで到
るものである、そこで他の身色に於て嫉心を起さぬやうにして、外の人がどのやうに縹
致が美からうが、どのやうに藝能が出來やうが、其の人に對して嫉妬の心のないやうに
したいものである、外の衆具と云ふのは、外の人の身に著けて居る著物とか、道具とか
云ふやうなもので、外の人が非常に立派な著物を著て居り、非常に良い帶を締めて居り、
大變結構な簪を差して居ると、口では、アー結構なものであると言うて居るけれども、
どうも夫れが欲しくなつて、其の人が憎くなつて來る、さう云ふ外の衆具に於ても嫉妬
心の起らぬやうに致したいと云ふことである、第五に、

内外の法に於て慳心を起さず

内外の法と云ふは、自身の身に附いたもの、自身の心に屬したものが内法である、外法
と云ふのは、自身の身の以外のもの、即ち道具であるとか金であるとか、著物であると
か、さう云ふ種類は皆外法なんである、慳心と云ふは、慳貪の心、惜み心、惜しいと云

ふ心は誰れしもあることであるけれども、此の惜しいと云ふ心に於ても、女と云ふものは男子に較べると格別ひどいものである、マア裁縫のことであらうが、或は琴ぢや、花ぢや、等の事であつても、極く肝心な處になると、夫れを人に敎へると云ふ事を、面白くないやうな考へを起すものと見えて、モウ玆と云ふ處に至ると、どうも敎へないやうなことが隨分あるものである、夫れが内法に於て慳心を起すのである、夫れから或は著物を人に貸すとか、人に遣るとか、或は其他の財物、金であらうが何んであらうが、人に惠んで遣ると云ふやうなことになると、別に自身の方で、さう必要のない、無くても宜いと云ふやうなものでも、何んだか人に遣るのは惜しいやうな心が起る、これは男子にもあるけれども、比較すると女は其の心が多い、即ち女根性、さう云ふ女根性を起さぬやうにしたい、第六に、

自らの爲に己れの受くる處の財物を蓄へず、凡そ受くる所あれば悉く貧困の衆生を成就させません。

これは大變積極的の方である、前のは總て消極的である、自ら自分の爲に財物を蓄へて置くと云ふやうなことをしないのである、これは竝の人間では一寸出來ることではない、餘程菩薩がゝつた仕事である、自分の爲と思うて金を仰山貯めて置いたり、物柄を蓄へて置いたりするやうなことを致しますまい、凡そ受くる所のもの、即ち餘所からして金を受取る、物を貰ふと云ふことになつたなれば、夫れを自身一人で用ひると云ふことをせずに、悉く之を人に施して、貧苦の衆生を救ひたいことである、と云ふ意味合なんである。

これから後ちは皆文章が長くなりまして、煩しいから略して置いても宜からうと思ひ

ます。これから後は總て皆、今の領解と同じやうな具合で、積極的の方である、どうぞ貧窮な者を救ひたい、啻に人間のみならず、畜類に至るまでも佛法の因緣を與へて遣りたい、と云ふやうな箇條になるのです、詳しくは其のお經に就て御覽になれば分りますから、茲では時間もありませんから一々お話することは略します。

兎に角勝鬘夫人と云ふお方は、誠に立派なお方である、聖德太子の義疏によつて見まするとと權化である、竝々の人間ではない、實に女としては立派な德をお具へになつたのである、其の立派な德を具へるやうになつたのは、何からなつたのであるかと云ふと、矢張りこれは前に申した如く、法華經の精神によく適はせられた處から、さう云ふ立派な人にお成りになつたのである、其の法華經の精神と云ふのは前に申した如く、何事をするにも自身を中心としない、自身の爲と云ふことを棄てゝ了ふ處から、初めて斯やうな立派な菩薩的の行ひが出來て來る譯になる、夫れで法華經の精神に於て、女たるべきものが服膺して、實際此の世に處すると云ふことになつたなれば、此の勝鬘夫人の如く現はれるのであるから、日本の女たるべきものは、皆此の勝鬘夫人の如くなれと云ふ處から、日本國民に女の手本をお示しなされたものであらうと、窺はれるのであります。

第十二　日本の佛教（六）

法華經の精神と他力念佛

法華經の精神を實際自身の上に實現すると云ふことになれば、男子は維摩居士の如くになり、女子は勝鬘夫人の如くになるのであるが、其の法華經の精神に適うて萬事萬端の事をすると云ふのには、所謂三軌に依らんければならぬ、其の三軌の中でも取分け空でなければならぬ、前申す如く、我利々々根性と云ふものをスッカリ押し除けて了うて、所謂空な心になつた處で、初めて法華經の精神に適ふと云ふことになる、六ケしい言葉で申せば、卽ち我々の胸の中の煩惱と云ふものをスッカリ除けて掛らんければならぬ、此の煩惱のある心のなりで、唯だ頭の中で、法華とはこんなものである斯う云ふものであると云ふことが分つたゞけで、實際夫れが自分の身の上に現はれて來ると云ふこと

がなくては可けない、そこで三軌によつて、法華の精神によく適うて、萬事萬端の事を實行すれば、男子は維摩居士の如くになれる、婦人は勝鬘夫人の如くになれる、と云ふことをお示しになつたのであります、これは日本人でなくても、支那人でも其の通りの譯である、支那人でも其の通りになる譯であるからして、其處は日本の佛教と云ふ程の値打のある譯のものぢやないのです、唯だ此の空になると云ふことが、どうしてなれるか、山の中へ這入つて一番修行をせんければならぬとか、谷間で坐禪をせんければならぬとか、斯う云ふことであつたならば、支那の佛教が夫れなんである、さう云ふ佛教なれば、今日我々の生活の上に直ぐに佛教を現ずると云ふことは理窟の上では言へるかも知れぬけれども、實際中々出來ることではないのである、山の中へ這入らず、谷の底へ這入らずして、今日此の社會に處して、自身々々の職業を遣りつゝ、生活をしながら、

心易く夫れを直ぐに佛法に適ふやうにして行くやうになれると云ふ處が、其處が其の支那とは違うて、日本佛教と謂はれる特色である。

夫れはどうすれば出來るか、夫れはお經の中に說いてある、說かれてあるけれども、支那人の眼には這入らぬ、眼に著かなんだ、夫れを日本人が見て初めて其處に氣が著くことになつた、卽ち聖德太子のお眼には其處に氣が著くやうになつたのである、其處は一體どう云ふ處であるかと云ふと、これが前にお話し致しました篤敬三寶と云ふ處なんである、篤敬三寶と云ふことは、一ト口に云へば、佛樣が本當に有難うなることである如來樣が本當に有難うなり、佛樣のお慈悲が眞に心の底から有難うなる、と云ふことにさへなつて來りやァ、山の中へ這入らずとも、谷の底へすくまずとも、其處に直ぐ自身の煩惱が起らぬやうになり、自身の胸の中がスツカリ綺麗になる譯である、餘程ひどい

異つた六ケしい仕事をせんければならぬと云ふのではなく、心底から如來樣が尊くなり、佛樣のお慈悲が眞に有難くなり、其の心を以て商賣をし百姓をすると云ふことになれば其の商賣が直ぐに法華の精神に適ひ、其百姓が直ぐに法華の理に適ふことになり、職業其の物が直ぐに佛法に適ふと云ふことになる、卽ち佛の道に適ふことになる、其處が卽ち篤敬三寶と云ふことである、そこで十七憲法の初めに於て、篤く佛法を敬へと、仰しやつたのである。然るに篤敬三寶と云ふたゞけでは前に申した意味は明に分り難いけれども、夫れが眞宗などになると、其邊の處が明かに現はれることになるのである、蓮如上人の御文章の上に就て云ふと、

妄念妄執の心の起るをも、止めよと云ふにもあらず、あきないをもし、奉公をもせよ、獵漁りをもせよ。

妄念妄執を自分の心から取つて除けようとしても、夫れは中々容易に取つて除けられる譯のものぢやアない、前にお話した通り、眞に自身の心底から悔い改めようとしましても、中々さう云ふ都合にはなつて來ない、自分の力でどうぞ正義にならうとしても、中容易になれるものではない、で妄念妄執を、さう殊更取つて除けようと云ふやうな、骨を折らずとも、商賣する者は商賣しながら、百姓する者は百姓しながら、獵漁りと云ふことは餘り宜くないことであるけれども、乍併夫れも一家の生活上せんければならぬと云ふことなら、夫れも格別咎める必要はない、するが宜い、其の獵漁りをして居る其の儘が、卽ち佛の御恩を喜ぶ上から遣ると云ふことになりやア、自身の爲と云ふことは少しもない、自身の慾の上から夫れを遣ると云ふことはない、そこで其の仕事が、誠に綺麗な仕事になつて來る譯である、言葉を換へて言へば、卽ち所謂佛恩報謝と云ふ、報恩と云ふ處から此の事をすると云ふことになれば、一々が皆眞理に適ふやうな譯になつて來るのである。

であるからして、商賣をして居る者は商賣を止める必要もなければ、百姓をして居る者は百姓を止める必要もない、獵漁りをする者は獵漁りを止める必要はない、夫れは皆自身の慾の爲にするのではない、自身の贅澤をする爲にするのではない、皆んな此の社會の上に對して、國家の上に對して、其の御恩報謝と云ふ處からすると云ふことになれば、する事柄は色々差別があるけれども、其の差別の仕事其のものが、皆んな悉く其のものゝ眞理に適ふ、百姓は百姓の眞理に適ひ、商賣は商賣の眞理に適ふ、商賣は何んの爲めにするか、百姓は何んの爲にするか、これは社會の爲にする仕事なんである、自分の慾の爲にする仕事ぢやない、社會の上から百姓もなければならぬ、商賣も遣らね

ばならぬ譯である、我々は、社會の爲である、國家の爲であると云ふ處から遣ると云ふことになれば、商賣が商賣の本當の道に適つて行くことになり、百姓が百姓の本當の道に適うて行くことになる、夫れも、商賣は何んの爲にするのであるか、百姓は何んの爲にするのであるかと、一々そんな六ケしい理窟を心得て遣つて居つたら、中々容易に行く譯のものではない、夫れは頭の表面に起るだけのことで、心底からそんな心の起るものではない、然るに御恩が嬉しいと云ふ處からして遣る、佛のお慈悲を喜ぶ心底からして恩德を感謝すると云ふことになれば、其の感謝すると云ふ當念は、實に微塵程も汚れたものはないのである、これは世間の上で考へて御覽なさい、本當に自身が有難いと云ふことになりやァ、其の向ふの恩德を心底から感謝すると云ふ其の中には、利も慾も何んにもありはしない、あの人から大變御恩を蒙つた、自身はあの人の爲に今日があるのである、あの人がなかつたならば今日はないのである、今日自身が僅かでも生命を繋いで其の日を送ることが出來るのは全くあの人のお蔭であると云ふ、恩德を受けて居る人の御恩が本當に心に這入つて、眞に有難いと云ふ感じが起つた上からには、どうぞあの人の御恩德を報謝したいものである、どうぞあの人の心に適ふ事を何かしたいものであると云ふことになつて來ると、其處には少しも勘定する氣は起らない、どうぞあの人の喜ぶ物、あの人の嬉しがる物を差上げたいと云ふのみで、勘定も何もない、あの人には是れだけの御恩を受けて居る、これは五圓掛る、五圓ではチッと多からう、マァ三圓位が宜からう、之れを遣つたら喜ぶだらうが、併し十圓では遣り過ぎであらう、七圓位にしようかと、斯う云ふ勘定する念は起らない、心底から御恩を感謝すると云ふことになれば、其の心は誠に綺麗な心なんである、夫れで眞に佛の御恩を思つて、如來樣が有難いと云ふ

ことになれば、其處に直ぐに法華の精神と云ふものが現はれて來る、夫れだから其の人を妙法蓮華と云ふ、これは其の人の德名である、親鸞聖人は『是人名分陀利華』是の人を分陀利華と名づくと仰せられた、此の蓮華と云ふことは、眞理の名でもなければお經の名でもない、其の人の德名なんである、さう云ふことは日本人が考へ出したのでもなければ、傳敎大師が思出したのでもなければ、親鸞聖人が考へ出したのでもない、チヤンとお經の中に現はれて居ることである。

若念佛者。當知此人。是人中分陀利華

と觀經の上に明かにお說きなされてある、法華經の中には眞理の名として妙法蓮華とお說きなされてある、それが觀經では信者の德名になる、其處へ日本の人間は初めて眼を著けたのである、そこで聖德太子の上では、篤敬三寶と云ふだけでは、まだ其邊がボンヤリとして居つて明かにはなつて居らないけれども、其の篤敬三寶と云ふことを能く推し擴めて見ると、前申す樣なことになつて來んければならない、さう云ふことを考へると、聖德太子は矢張り他力の御信仰に住してお在でなされた人である、如來樣のお慈悲を自身も信じ、人にもお勸めなされたのである、それで親鸞聖人は

聖德皇のあはれみて、佛智不思議の誓願に
すすめいれしめたまいてぞ、住正定聚の身となれる。

と御讃嘆なされてある、親鸞聖人の聖德太子和讃と云ふものは、初めから終ひまで、他力の信仰によつて、如來の誓願不思議を御自分にも御信仰になり、人にもお敎へになつたお方であると御讃嘆になつてある、一寸見ると、聖德太子にドコにそんなことがあるか、他力の本願を信ぜよの、阿彌陀樣の御本願を信ぜよのと云ふことがドコにあるか、

これは親鸞聖人が自分の御都合の好い事をお書きになつたのである、と云ふやうに見えるけれども、其の篤敬三寶と云ふ意味合を能く推究して見ますると、どうしても其處に行かんければならぬ譯合になる、他力の本願を語を換へてお弘めになつてあるのである、併し其處が聖德太子の上では明白に說かれてない、夫りやァ一時に行くものではない、段々明白になる、まだ研究が積まぬ處で、段々研究が積んで來る、これは總ての物の上にもあることで、其處が卽ち發達である、日本の佛敎は聖德太子の上では、今申すやうな具合で、明白に、極く推し詰めた處まで現はれ來て居るかと云ふと、さうは中々來て居らない、聖德太子から段々順序を經て、段々夫れが現れて來て、到頭親鸞聖人に至つて、夫れがズッと明かになつて來た、けれどもまだ親鸞聖人の上では十分明白に言葉の上には現れて居らぬ處があるが、蓮如上人に至つて初めて夫れが明白になつて、何から

何に至るまで、皆んな佛恩報謝と云ふことになつて、飲む水までも佛恩報謝、朝夕は如來の御用で、三度の食事をするのも、日々の仕事をするのも、皆悉く佛の御用と思へ、佛の恩德を報謝するのであると云ふやうに、明白にお示し下されたのが蓮如上人である聖德太子の上ではまだ夫れ程明白になつて居らない、夫れが傳敎大師を經て親鸞上人に至り、蓮如上人になつた處でスッカリ現はれる、そこで本當の日本の佛敎と申すと、私から申すとをかしいやうであるけれど、矢ッ張り此の眞宗なんである、これは誰れが見てもさうとしか思へない、外のお宗旨では支那流が幾らか雜つて居る、誰れが見ても夫れはさうでないと云ふことは言へない、天台宗でも華嚴宗でも、これは無論の事であるが、其他に至つても、同じ他力の方でも、淨土宗は他力の法が發達したのであるけれども、併しまだ形の上では矢張り支那流なんである、日蓮上人のお說きなされたのは、誠

に結構な法である、支那に於てはまだ見る事の出來ない結構な法であつて、日本へ來つて初めて發達したと言ふけれども、姿や形の上では矢張り支那流を免れて居らないことになる、弘める處の法の内容、其の外に現はれる姿、ドコカラドコに至るまで、支那にも印度にもない、日本へ來てスッカリ出來上つたと云ふのは、眞宗より外はないのであるから、これは誰れが言うても否定することは出來まいと思ふのである、自分の宗旨に都合の好い事を言ふと思召す方もあらうか知れぬけれども、此のスッカリ日本的になり切つて居る、さうして所謂國民の精神を涵養して行くと云ふのは、此の眞宗より外はないのである。

第十三　日本の佛教（七）

宗教の本旨

今日の人は、夫れは成程一寸聞くと宜いやうであるけれども、併し眞宗は未來的である、未來の事ばかり言ふ、極樂ぢやとか地獄ぢやとか、そんな未來の話ばかり言ふ、そんな宗教は、これからモウ日本には要求せられないと、斯う云ふ人があるけれども、夫れは極く考への足らない話であると思ふのである、成程未來の話に違ひない、未來的の宗教には違ひない、今度死んだら淨土詣りをさせて頂く、佛にして頂くのである、斯う云ふ未來的には違ひないけれども、其の未來の信仰と云ふものが、直ぐに現在のものになるのである、未來を照す光りが卽ち現在に反射するのである、其の未來から反射した光りで現在を遣つて行くのである、そこで現在と云ふものが樂に行くことになる、早く

云ふと、今日の現實より以上の光りを以て此の現實の上を照して來るのであるから、夫れで現實が安らかに行けるのである、現實の上だけで現實を安らかに遣らうと云ふのは夫れは無理な話である、出來る譯はない、現實は動くものである、卽ち便りにならないものである、値打のある者ではない、前々から申すやうに、現實と云ふものは、變化ばかりのものである、佛敎の言葉で言ふと卽ち無常である、無常と言ふ處には苦と云ふ外はないのである、人世は苦である、苦であるものなら値打のあるものではない、値打のないものに値打を附けようと云ふには、何か外から持つて來なければ附けられる氣遣ひはない、値うちのないものだけで値打を附けて行かうと言つたつて、そんなことの出來る譯はない、動くものを動くものが促まへて、動かぬやうにしようと言つたつて、そんな事は出來ない、現實は動き詰めに動いて居るものである、少しも便りにはならない、

少しも當てにならないと、云ふことは誰れしも實驗をして居る處で、嘘ではない、其の動き詰めに動いて、少しも當てにならない、便りにならないと云ふものを持つて來て、夫れを便りの付くやうにしよう、賴みになるやうにしようと言つたつて、そんな事は出來る譯はない、夫れを便りのあるものゝやうに、値打のあるものゝやうに仕向けて行くと云ふには、外から物を持つて來んければ出來ない譯である、夫れだから未來の光り、未來の光りと云ふのは佛の光である、悟りの境界の光り、其の悟りの境界の光りで此の迷ひの世界を照して、迷ひの世界に便りを拵へ、迷ひの世界に値打を附けて行く、そこで初めて現實の上に値打の附くことになる、賴みが出來て來ると云ふことになる、要するに、此の人世は意義も目的もあるものではない、けれども人世は意義がない、目的がないと、夫れだけのことでは仕やうがない、意義もなければ目的もないと云ふならば畜

生同様で、遣り放題遣るより外はないのである、さうなつて了うては現在は仕やうがない、人生其のものは値打もなければ意義も何もあるものぢやァないけれども、夫れに意義を作つて行かなければならぬ、夫れに目的を附けて、値打のあるものにして行かんければ、現在と云ふものは良くなつて行くことはない、其の意義のない目的のない値打のないものに、値打を附けると云ふには、外の意義のあるもの、値打のあるものを其處へ持つて來んければ、其奴に値打や意義の附く譯はない、夫れをよく考へぬと、未來の信仰、そんな詰らぬものが現在に何の役に立つか、死んだ先きの事では現在の上に何んにも用立たないと、思ふやうなものであるけれども、決してさう云ふ譯のものではないのである、自分の心を悟りの境界に移して、其の悟りの境界の上からして、現在の人生と云ふものを取扱ふと云ふことになるからして、夫れで現在が大變結構に行くやうになる、値打も付き、意義も目的も付いて行くと云ふ譯になる、ぢやから未來がなければ可かぬ、宗教は未來でなければならぬ、宗教と云ふものは、どの宗教でも本來未來的のものである、夫れでなければ信仰が立つ譯のものではない、ところが耶蘇教は近來此の未來と云ふものを現在の上に於て說かうとして、到頭終ひには本當の力と云ふものはなくなつて了つた、今日新教の方では、理窟の上から現在に結び付けて說いて居るけれども、其の內實の處は、力と云ふものは薩張り無くなつて了つた、併し舊教は依然未來的の力を持つて居るから、實際の力は舊教にある、西洋の人に聞いて見ても、本當の實力は矢張り舊教にある、新教と云ふものは、今日自分達の修めた處の學問知識で、さうして現在の人間の頭へ這入るやう〳〵に變へて行く、夫れだから本當の力と云ふものは出來ない、夫れで統一と云ふものが薩ッ張りないことになつて了つた、ところが佛教

の方でも耶蘇教の方の眞似をして、矢張り現在を重んじ、未來の話をしないやうに、近來はなつて來た、夫れを現代の人は喜ぶ、未來は尠くして置いて、現在の上で有難味を拵へて、佛樣のお姿を見るとか、お光明を見るとか云ふやうなことを言ふ、一寸、人が喜ぶやうであるけれども、能く考へて見れば、佛樣が見えるものでもなければ、お光明が見えるものでもない、理窟から考へ、自分の理想から考へたら、或はさう云ふことが言へるかも知れぬ、世界の事は總て如來樣のお手廻しであると思へば、思へぬこともないけれども、夫れは自分の頭の上からさう云ふやうに思ひ直して來るのである、理窟の上から段々さう云ふやうに思ひ直して來るのであるから、さう云ふ餘裕のある時は夫れで宜い、自分の心に餘裕のある時には夫れで一應は濟んで行く、少々自身に都合の惡い事があつても、イヤ〳〵これは佛樣のお手廻しである、お氣を付けて下さるのである

と斯う思へば、夫れで濟んで行く時は宜い、けれどもそんな事の考へられぬ酷いことに出遭ふと云ふと、幾ら考へて見ても、自身の爲に佛樣がお手廻し下されたのであると、そんなことの思へる譯はない、商賣をして損をしても、僅か百圓か二百圓であると云ふと、ヤーア失策した、イヤ〳〵これも佛樣がお氣を付けて下されたのであると、斯う思へば思へぬこともない、夫れは、自身の身代に疵が付かぬ位のことであるから、そんなことが言うて居られるけれども、酷い目に逢うた時には、中々そんな事の考へて居られるものではない、如來樣の顏を見ると却つて憎くなる位である、今茲に自分の極く好きな道具がある、自身の身代不相當の金を出して其の物を買うた時には、少々借金をして利息を出さんければならぬけれども、其の物を見ると樂みがある、朝から晩までひねくつて樂んで居る、其のうちに自身の可愛い子に別れるとか、自分の孫に別れるとか、或

は自身が身代限りをせんければならぬやうな酷い目に逢うて、朝から晩まで借金取りに責められんければならぬと云ふやうになつたら、其の道具を幾らひねくつても、何んにも面白いことはない、夫れだからして、そんな氣の利いたことを考へて行く餘裕のあるうちは宜いけれども、其の餘裕のない時になると、そんな事は考へられる譯のものぢやアありはしない。

此の間も或る處の中學校の教員で某と云ふ人で、餘程精神に變調を來したやうな男であるが、以前から一寸知つて居るものですから、先達ても俄かに私の處へ訪ねて來た、何しに來たかと逢うた處が『私は自身の精神上の事に就いて態々上つて參りました、あなたのお話を承りたいと思ひます』『さうか、夫れはどう云ふとか』『エ、私は近來一寸家庭の事に就て非常な六ケしいことが起つて、日々煩悶を致して居ります、と

ころがさう云ふことになると、私は是れまで佛樣のお慈悲が有難いと喜んで居りましたが、夫れが少しも有難くなくなつて了ひました、これはどう云ふものでせう、此の間中も或る御方の處で夏の講習會がありまして、夫れへ聽講に參つて居りましたが、話をせられる御方は、實に熱心に、實に有難うて仕やうがないと云ふやうな鹽梅式でお話になる、けれども私は何んともない、私は夫れを聽いて居りましても何んともありませぬ、どう云ふ譯で斯う云ふことになつたものであらうか、自身ながら合點が行かぬのである』と斯う云ふ話である、そこで私は『一體お前さんの信仰はどう云ふ信仰だ』『ヘエ私の信仰は、近頃チッと變りました』『さうか、どう變つた』『私は以前には矢張り說教でお說きなさる通りに戴いて居りました、佛樣のお慈悲によつて、此の罪業深重の者が、今度死んだら佛にして戴く、夫れを誠に有難いと思うて居りました、

ところが先達て別府の温泉へ暫く行つて居りました、其の温泉宿の主人が非常の喜び家で、毎日私の處へ來て御法話をする、其の法話は、どう云ふ法話であるかと云ふと、卽ち我々は現代の上に於て總ての恩寵を受けて居る、此の卓子からも卽ち恩寵を受けて居る、茶碗からも恩寵を受けて居る、疊からも恩寵を受けて居る、總べての恩寵の中で日暮をして居る、誠に有難いことであると云ふ、斯う云ふ法話なんである、實に熱心に、毎日々々話された處から、私も夫れが眞に有難いやうになつて、以前の信仰はドコへやら行つて了うて、其の後は、見る物聞くもの自身が恩寵を受けて居ると思へば、何を見ても眞に夫れを拜みたいやうな心持になりました』斯う云ふことであつた、そこで『サア夫れぢやから可けない、夫れぢやから君は何んともないやうになつて了うたのである、平生心に煩悶のない、何事もないと云ふ時には、夫りやァ卓子も有難い、茶碗も有難い、何も彼も有難いであらう、昔から雪隱の板にも御恩があると云ふことを言ふから、何も彼も有難いに違ひない、餘裕のある時にはさう考へられることもあらうけれども、自身の心の中に大變な煩悶が起つて來たならば、何を考へても何んともない、何を眺めても有難いことも何んともあるものぢやァない、君の有難くなくなつたのはさう云ふ次第である、夫れで矢張り前の信仰の方が本當の信仰である、前の信仰に戻つて、前の信仰の上からして、日々佛恩を喜ばせて貰ふと云ふことにならぬことには、イツまでも喜びが絕えぬと云ふ都合には行かない、以前のやうな信仰であつて見れば、現在の上が縱令少々苦しいことがあつても、此の者が今度は佛にして戴くのであると思へば、幾らか細そ〳〵ながら喜ぶ心が起るけれども、唯だ現在の上だけで有難いと云ふことであつて見ると、少しく都合の惡いことが起ると、何

んともなくなるのは當り前の話である、矢張り以前の信仰が宜いのであるから、元の信仰に戻つて、其の信仰を相續して行かんければならぬ』と、斯う云うて別れました、其の人は少し精神上並の人とは違うた人でありますから、其の後どうなつたか、暫く逢ひませんから分りませんが、近頃はさう云ふ人が澤山あります。

餘裕があればどうでも思へる、餘裕のないときになれば、平生頭で考へて居たことは間に合はぬ、禪宗などで坐禪をするのはそれである、一に二を足すと三つになると云ふ數理的の考へと云ふものは、少しは餘裕がなければならぬ、けれども人生の事と云ふものはそんなに都合よく行くものではない、フイと遣つて來ることがある、我々の考へを許さない時がある、さう云ふ考への許さない時でも、此の坐禪をして居ると云ふと、考へなしに其奴が出て來る、坐禪の功の積んだ人は、どんな急な時に臨んでも、少しも何んとも思はぬ、其の時々に應じて考へなしに遣つて除けることが出來る。

越中に、今申すやうな、何を見ても有難い〳〵と言うて居る連中があつて、其の中の或る人が、

どこやらへ行つて、ポンと頭をひどく打つた、さうすると、『これも如來樣のお蔭だ』と言うて喜んだと云ふ、夫れは宜かつたが、其の頭を打つが早いか『アー有難い』と斯う行きやァ宜いけれども、矢張り夫れまでに幾らか間があつたと云ふ。

夫れで、一と二と合せば三になると考へる餘裕があれば、如來樣のお手廻しだと喜ぶことが出來るけれども、そんな暇のない時には喜は出て來ない、ぢやから此の宗教と云ふものは、現在ばかりで行く譯のものではない、どうしても信仰の根柢を未來に置て、未來に向て得た光りで現在を返照して行くと、現在と云ふものが非常に有難いものにな

つて來る、其の未來の光りは極く小さいものである、電氣の光りと云ふものは、細い針金から出て、さうして十疊の間でも二十疊の間でも一面に照らす、信仰も夫れでなければならぬ、信仰の頓との中心は小さいもので、死んだら佛にして頂くと云ふ夫れだけである、此の罪惡深重の者が、佛の慈悲の力で、此のまゝ佛にして頂く、これだけの小さいものである、其の小さい口から出る處の光りは總ての物に輝くのである、して見ると、これも御恩ぢや、これも有難いと云ふボンヤリした中心のない信仰は、事のない時は夫れで濟んで了ふが、まさかの時には其奴は消えて了ふ、ぢやから宗教の信仰と云うたら、自身の經驗の上から言ふと、眞宗のやうな信仰でなければ可かぬものである。

眞宗から出て居る大學生が、一日、宴會を開いた、其の時醫學生の話であつたが、大學で日々死ぬ人と云ふものは大變なものである、自身は大學の助手をして居るのであるから、始終病人に接するのであるが、醫者でも、人の死ぬ時ほど厭なものはない、別して自身が手を掛けた病人が死ぬと云ふことになると、誠に夫れは可けないものである、唯だ自身の身の上に取つて淋しい心が起るのみならず、附いて居る病人の家族に對してお氣の毒で申譯のない樣な心が起る、實に其處に居ることの出來ないやうな心持がする、夫れで自身の仲間中にも助手は澤山あるのであるが、病人が今モウ息が切れると云ふ時に病室から呼びに來ると、サア君行け〳〵と言うて皆んな讓り合うて行かない、自身はさう云ふことに經驗したいと云ふ考へであるから、さう云ふ場合にはおれが行かうと云うて私が始終行く、始終行つて、病人に出來るだけ手を盡して遣る、さうして到頭息が切れた時になると、外の者なれば、氣の毒であつたと言つてズツと歸つて來るのであるが、私は其の場合暫く止まつて、遺族へ對して話をする、これは

飽くまでも手を盡した、けれども斯う云ふことになつて了つてお氣の毒であるが、致方がないから斷念めて貰ひたいと話をして歸る、宗教の上から考へて、今死ぬると云ふ病人の心理狀態はどんなものであるかと云ふと、どうしても未來的の信仰を持つて居る者は煩悶が尠い、未來的の信仰を持つて居らぬものは必ず苦しむ、私の經驗では日蓮宗の信者には煩悶する者が多いやうに思ふ、あれは現在的である、未來と云ふことは餘り言はない、夫れで日蓮宗の人は矢張り煩悶が多い、夫れからして耶蘇教の人も矢張り煩悶が多い、其處になると云ふと、此の眞宗の信者は大變振合が違ふ、死ぬ時になると、外の者に比較して大變樂である、斯う云ふ話であつた。

夫れはさうであらうと思ふ、日蓮宗は誠に氣の利いた立派な教義でありまするけれども未來と云ふ側になると餘り考へがない、耶蘇教もさうである、舊教の方の側は幾らか未來と云ふ考へがあるけれども、新教の方は全るで天國へ生れると云ふことは言はない、ところが此の眞宗の者になると、死ぬ〳〵と云ふことはイツも聞いて居る、眞宗の繁昌な處のものであると、毎日一遍づゝは聞かぬことはないと云うても宜い位である、始終死ぬと云ふことを覺悟をして居る、夫れだから死ぬと云ふことを格別恐れると云ふことはない、夫れに向つてえらい修養をしたと云ふ程でないけれども、幾らか其處に修養が出來て、慣れて來て居るから、左程煩悶もしない。

嘗て大學の學生で病氣に罹つて大學病院へ這入つて、到頭死んだ、ところが其の病氣中、國元からして親類や親がまだ來なんだ以前其の朋友の者が看護をして居つた、其の病人はどうも六ケしい、全快が出來ないと云ふことになつた、けれども病人は生きる積りである、そこで、こりやアどうも氣の毒なことである、今からして全快が出來

ないと云ふことを本人に聞かせて決心をさせた方が宜からうと、看病をして居る朋友同士が相談したけれども、さてどうも病人に直接に、君は全快が出來ないと云ふやうなことは言へない、さうかうして居るうちに國元から親が上つて來た、そこで親に其の事を告げた、實にお氣の毒なことであるが、醫者に聞いて見たが到底六ケしい、同じ六ケしいものなら、今から決心をさせたが宜からうと思うて居るけれども、さてどうも私共が病人に直接にさう云ふことは言ひにくい、今日まで能う言はずに居る、斯う云ふと、親は西國の人で、西國の人は非常に眞宗の信仰が厚いから、其の事を聞くが早いか、イヤさう云ふことなら私が行つて話しますと平氣なものです、其のなりで病人の處に往つて『お前はお醫者さんに聞いて見ると、全快が出來ないさうだ、其の覺悟をせんければ可かない』と、どうも臆する處もなければ何んとも思はぬ、聞いた者も左程驚かぬ、『平生から言うて聞かせるのは此處である、未來のことはどうである』と、親は茲で平生から聞いて居ることを　て聞かせる、子供も平生聞いたことを言ひ出して、後生未來と云ふことに心を固めると云ふことになつて、誠に其邊の處が樂なものであつたと云ふことである。

死ぬと云ふことは平生から聞いて居る、東京あたりでは死ぬと云ふことを嫌つて、シの字さへも言ふことを嫌つて居る、一、二、三、四の四の字までも嫌ふ、東洋大學の電話は四百四十四番で、井上圓了君はあァ云ふ氣質の人ですから、人の嫌ふやうな番號を安く買ひ込んだ、さう云ふやうな具合で、一二三四の四まで嫌ふと云ふやうな人間は、今死ぬと云ふことになるとサア煩悶する、夫れだから、兎に角此の死ぬと云ふことはあることに違ひない、言うたから早く死ぬと云ふ譯のものでないから、平生から此の死ぬと

云ふことに就て決心をして置くと云ふことが最も必要であらうと思ふ。

第十四　日本の佛教（八）

佛教教理と國家道德

少し話が後戻りをするやうでありますが、前々から違があつたら話さうと思うて居るのであるが、ツイ談話の都合などで言はずに了うた、順序が前後するやうになるかも知れませぬが、聖德太子が佛法をお弘めなされたのは、以前にも申す通り、一つは鎭護國家の法としてお弘めなされた、一般の國民に佛法を御紹介なされて、國民の道德を此の佛教を以て涵養しよう、國家を維持し皇室を擁護したいと云ふ處からお弘めなされた、此が日本の佛教の餘程振合ひの違ふ處なんである、唯だ個人々々の道德を完全にすると云ふのではなくして、之を以て國家を擁護しようと云ふ國家的のものである、耶蘇教などは人類を本として個人的の道德である、人類としての道德を拵へると云ふ方の側が、

耶蘇教の始終主張する處で、人は正義にならんければならぬと云ふことを八釜しく言ふが、忠とか孝とか云ふやうなことは言はない、却て何んにもならないものゝやうに考へて居るけれども、佛教が日本に弘まつたのはさう云ふ譯ぢやアない、今の言葉でいへば、佛教でもやはり、正義を教へるのであるけれども、その正義と云ふは、耶蘇教とは違ふ、佛教では國家と云ふことが土臺になつて居る、弘める方の側から言ふと、佛教で國家を擁護すると云ふ、其の國家を擁護すると云ふには、矢張り其の人々の信仰に住して、所謂正義になつて來んければ、國家の擁護にはならぬ譯である、即ち佛の加護と云ふものの加はると云ふことは、信仰に住して正義になつて來るからして、自然に神佛の加護がソコに加はる、即ちソコから國家の擁護と云ふことになるのである、けれども其の正義と云ふのは、耶蘇教の云ふやうな、唯だ人間としての正義と云ふのではない、一般の人民が、皇室を中心として、國家を維持し皇室を擁護しようと云ふことになるのが即ち正義なんである。

夫れでどう云ふ譯でさう云ふことになるのであるかと云ふと、佛教の教理其の儘が矢張りさう云ふ風なものであるのです、平等に即しての差別、差別を壞さずしてソコに平等を說くのが佛教である、佛教は平等と云ふことも言ふけれども、差別を壞して了うて平等を言ふのではない、差別の上に於て平等を說くのである、耶蘇教などであつて見ると、單に平等と云ふことのみを言ふ、夫れで一面から言ふと世界的だなどゝ言ふけれども、夫れでは日本と云ふ觀念は起らぬ譯である、そこで日本の國家と云ふ方の側から眺めると、どうも其處に具合が惡い處が出來て來る、佛教は即ち此の平等に即した差別、差別に即した平等を說くのであるからして、平等を語つて而も差別を離れぬ、即ち言葉

を換へて言ふと、世界的と云ふものは取りも直さず國家的なんである、人類としての道德と云ふのが、國家的の道德になる、そこで日本に於て佛教の說く處の道德と云ふものは、皇室を中心として、日本の國家と云ふものをドコまでも發達させようと云ふことになつて來るのである、ソコが耶蘇教などゝ振合ひの違ふ處なんである。

これは哲學的の話になつて、チツと小六ケしい話になるかも知れぬけれども、佛教の哲學の大體を申すと、前々から申す如く、一面に於ては平等である、世界萬有其の物の自性から言へば、異つた物は少しもない、山であらうが川であらうが、人間であらうが畜生であらうが、其の物の自性から言へば何んにも異つた處はない、恰度海の水のやうなものである、幾ら浪があらうが、どれ程異つた浪があらうが、其の澤山な浪、異つた浪は、其の浪其の物の本性は潮水と云ふより外はない、ドコからドコに至るまで潮水で、

海全體が即ち潮水なんである、そんなら其の少しも異らぬ潮水がなぜ高い浪になつたり低い浪になつたり、さう云ふ差別が出來て來るかと云ふと、佛教の術語で言へば、即ち因緣と云ふものが掛るから、同じ物でも色々な物の姿になつて現はれる、種々樣々な物になつて現はれる、英吉利の海も日本の海も、北海の海も南海の海も、海は同じものなんである、同一の潮水なんである、けれども南の方の海は浪が小さい、北の方の海は浪が大きい、なぜさう云ふ風に異るのであるかと云ふと、即ち事情が違ふからである、即ち因緣が違ふからである、南の方は風が穩かであるから浪が立たない、北海は風が强いから浪が立つて來るのである、夫れで物柄は同じ事でも其の事情が違ひ、其の因緣が違ふと云ふと、夫れによつて種々樣々な物になつて現はれるのである。

何から何に至るまで同じ物ぢやと云ふ側に於て、之を人間の上に就て言へば、人間は

誰れも彼れも同じ物であると其邊からして博愛と云ふことが出て來る、同じ人間である。以上は同じやうに付合ひをして行かんければならぬ、自分を抓つて痛ければ人を抓つても痛い、ぢやから人を抓つては可けない、斯う云ふことから博愛と云ふことが出て來る。ソコは耶蘇教も同じ事である、然るに耶蘇教は平等一邊である、人間は皆神樣の子ぢやと云ふ、けれどもソコに差別が付かない、即ち日本人と外國人との差別が付かない、天子樣と人民との差別が付かない、自分の親と他人の親との差別が付かない、人間なら同じものだと云ふやうに扱つて行く、即ち平等一邊である。遂にはソコが可笑しい事になつて來る、佛教の博愛と云ふことは決して耶蘇教の博愛のやうなものではない、佛教で同じ物だと云ふことは言ふけれども、乍併夫れは其の物の自性が同じ物だと言ふだけで、色々な事情によつて現はれて居る所の事情までも無視して同じ物だと云ふのではない、其の事情と云ふものは皆な別である、夫れで總ての物は皆な盡く異つたものである、恰度海の浪のやうなもので、高い浪も起り、低い浪も起り、種々樣々の差別と云ふものが浪の上に現はれて來るのである、けれども其の差別のある浪と云うものは、各々事情によつて現はれて居るけれども、乍併孤立的の物と云うては一つもない、廣い海の中にタツタ一つの浪があると云ふやうなことはありはしない、どれ程高い浪であつても、タツタ一つ起つたと云ふ浪はない、浪が起れば必ず海一面の浪になる、其の海一面の浪が一つ〳〵に關係を持つて居る、廣く言ふ時は英吉利の海に起つて居る浪は、日本の海に起つて居る浪と、關係がある、少しも關係がないと言ふことは出來ない、皆聯絡して、早く言ふと互に持ち合うて居ると言はんければならぬ、そこで天地間の總ての物、物々相依り皆んな持合うて居るのである、人間は澤山居るけれども、自分だけ孤立して居る

と云ふものはない、夫れを孤立して居るものゝやうに思ふのは間違ひである、百姓もなければならず、商人もなければならず、又職人もなければならぬ、夫れを商賣人は商賣人だけで立つて行けると思ひ、百姓は百姓だけで立つて行けると思うたら大變な間違ひである、總ての者が皆互に持合うて此の社會と云ふものが出來て居るのである、夫れに自己さへ宜ければ宜いと云ふやうな考へを持つて行くのは間違つたことである、世界中互に持合うて居るものぢやと云ふことになりやァ、世界中の者は互に助け合うて行かんければならぬ、互に有難うございますとお禮を言うて遣つて行かんければならぬ、佛教で言ふと卽ち夫れを一切衆生の恩と云ふ、總ての人に皆恩と云ふものがある、そこで其の恩に報謝すると云ふことになつて來んければならない譯になつて來る、乍併其の差別と云ふもの、起るのは、其の事情によつて違つて來るのである、其の事情によつて同一の物でも差別の姿を現はすと云ふと、各々差別の物が夫れだけの位置を占めて來る、茲に一つの浪が起ると云ふと、必ず夫れだけの位置を占める、同時に二つの浪が一つの處に起ると云ふことは出來ない、此の卓子と椅子とは一緒の處に置くことは出來ない、それと同樣で、或る事情によつて差別が現はれて、其の差別の物が各々位置を占めて居る、人間でも畜生でも、山でも川でも、各々位置を別に占めて列で居るものである、國家で言うても、英吉利は西にあり、亞米利加は東にあり、露西亞は北にある、各々位置を占めて居る譯のものである、各々位置を占めて居ると云ふことになると、其處に主と伴と云ふ區別が付いて來る、日本が南にあり、露西亞が北にあり、亞米利加が東にあり、英吉利が西にある、各々の國が位置を占めて列んで居ることになると、日本を主として言ふ時には他の諸國は皆日本に付いて居る伴である、露西亞から言へば露西亞が

主になつて、夫れ以外の國はそれに付いたもの卽ち伴になつて來る、此の如く差別の中に、物が各々位置を占めて掛ると、或る物が主となれば、他の物は付き物になつて、主伴と云ふものが別れる、主伴が別れると、その主と伴との關係に、親疎、親しいと疎いと云ふ差別が出來る、又遠近、遠いと近いとの差別が出來る、此の講演は誰れが主になるのであるかと云ふと、先づ講師が主となるのである、聽きに來て居るあなた方は伴である、ところが其の伴でも、主たる講師に對して近い方もあれば遠い方もある、さう云ふやうに、近いとか遠いとか、親しいとか疎いとかと云ふ差別がある、卽ち親疎遠近厚薄と云ふやうな差別が玆に現はれて來る、國の上に於て言へば、國家の上で、誰れが一番主であるかと云ふと、天子樣が主である、アトの者は伴である、其の伴の中でも、一番親しいのは皇族である、夫れから華族、夫れに次いで士族平民と斯うなつて來る、政治の上では總理大臣が一番親しい、其の次きが各省大臣、夫れから次官、斯う云ふやうな具合である、又一軒の家で言へば、家長と云ふものが家庭に於いて一番主である、家族は卽ち伴である、けれども其の伴と云ふものは悉く同一なものであるかと云ふと、決してさうではない、夫婦親子と云ふやうな關係があつて、妻と云ふものが主人に對して最も親しいものである、今度は其の子供と云ふものが親しい、夫れから下女とか下男とか、斯う云ふやうな關係になつて、そこに親疎遠近厚薄の差別が出來て來る、社會の上へ出せば朋友と云ふものがある、其の朋友の中にも矢張り親しい者と疎い者とがある、さう云ふやうに段々と差別が出來て來る、夫れは何から出來るのかと云ふと卽ち因緣である、天子樣とお成りなさるのは、天子樣にお成りなさるだけの因緣があつてお成りなされたのである、又皇族も皇族となるべき因緣事情があつて皇族とお成りなされたので

ある、皆其の事情の上から斯う云ふやうに差別が現はれて來るのである、そこで其の事情と云ふものを無視しないやうにして行かんければならぬ。

事情と云ふものは如何なるものであるかと云ふと、これも眞理から現はれて居るものである、平等と云ふ方の側も眞理であり、色々の事情によつて差別して現れるのも眞理である、夫れだから、平等と云ふものを一面から見れば差別であり、差別を一面から見れば平等である、其の差別と云ふものは親疎、遠近、厚薄それ〳〵の事情を無視しないやうにすればそこに差別が現れて來る、それで因緣を因緣として扱うて行かんければ本當の眞理に叶ふと云ふことは言へぬ、所謂人倫と云ふものが右の如き差別を無視せない處に於て立つて來るのである、國家の上で言へば、君臣と云ふものは、皆因緣から出來たものであるから無視する譯には可かぬ、無視すれば眞理に背く、眞理をないがしろにしたことになる、家庭の上に於ても、父子であるとか夫婦であるとか云ふやうなものがソコに立つて來んければならぬ、ソコを能く考へて行かんければ、本當に實相に適うたと云ふことは言へないことになる、天子樣なればどんな天子樣でも同じ事であると云ふやうなことでは、親疎遠近を無視する話である、同じ天子樣でも、我々から言ふと、露西亞の天子樣は緣が遠いお人である、日本の天子樣は大變親しい關係がある、夫れだから、吾等は先づ日本の天子樣へ忠義を盡さなければならぬ、愛を施すと云ふことは、先づ親疎遠近を見て、其の次第によつて遣つて行かんければならぬ、さう同一に遣れると云ふ譯はないのである、先づ遠い處のものは後にして、近い處の者に親切を盡す、國家の上であれば、忠義は誰れに向いてするかと云ふと、天子樣が一番親しい處のお方であるから、日本の天子樣に向つて忠義を盡す、夫れを露西亞の天子樣も同じ事ぢやと、露

西亞の天子樣に向つて忠義を仕掛けたら無茶苦茶になつて了ふ、家庭に於ても其の通り、同じやうに愛と云ふものを施さんければならぬけれども、其の愛は誰れに施すかと云ふと、親が一番大事なものであるから、先づ親に對して施す、孝行をすると云ふのは卽ち夫れである、夫婦の間で言へば、自身の夫は一番關係の深いものであるから、自分の夫を大切にしなければならぬ、然るに自分の夫も鄰りの夫も、夫としては同じ事だと云ふやうなことになつたら、大騷動になつて了ふ、夫れでは人倫と云ふものが成立つて行く譯はないのである、國で言うても其の通り、日本と云ふ國が成立つて居り、英吉利と云ふ國が成立つて居り、亞米利加と云ふ國が成立つて居るのは、皆各々事情があつてさう云ふ國が成立つて居るのである、其の差別して居る因緣と云ふものを無視して、皆な同じことにして了うては、夫れは間違つた話なんである、ぢやから其の因緣と云ふものを無視しないやうに遣つて行かんことには、此の宇宙の實相に適うた遣り方とは言へない譯である、そこで日本の人民としては、此の日本の國の成立ちと云ふものを能く承知して、其の因緣を無視しないやうにして、ドコまでも其の因緣によつて益々國の發達をするやうにして行かんければならぬ、夫れだから、百姓すると云うても、商賣すると言うても、教育すると言うても、何をすると云うても、日本に於てすると云ふ以上は、其の百姓が日本の爲になるやう、其の商賣が日本の爲になると云ふ考へを以て遣らんければならぬ、さうして廣く言へば夫れが世界の爲になる、卽ち一面から言へば平等的である、世界的である、世界的ではあるけれども、他の一面、因緣差別の上から言へば、同じ世界的と言うても、先づ日本の利益になるやう、日本の爲になるやうと云ふことを忘れぬやうにして遣つて行かんければ、本當に差別の道理に準じた遣り方とは言へないこ

とになる、そこが佛教と外の宗教と大變振合ひが違ふ處である、平等と言つても、差別を壞して了つて平等を說くのではない、差別の上に平等を說くのである、日本の爲に百姓をする、日本の爲に商賣をすると云うても、矢張り一面から言へば世界の爲にならなければならない、世界の事を考へて來んければならぬ、片手落ちのないやうに遣つて行くのが、眞の眞理に準じた遣り方と言ふものでございます。

夫れであるからして、法華經の道理に準じて、自身の私慾と云ふものを中心とせず、自己と云ふものを中心とせずして、百姓をし、商ひをすれば、直ぐに夫れが眞理に適ふ其の眞理と云ふものはどんなものかと云ふと、之れが平等に卽した差別である、一面から言へば世界の爲、一面から言へば國家の爲と云ふことを忘れないやうにして遣つて行くのが、眞に實相に準じた處の商賣、百姓と言へるのである、其の平等に卽した差別と云ふのは、自分の私慾を離れて國家の爲めと思つて商賣すれば、夫が取りも直さず日本の爲になつて、又世界の爲になるのである、百姓でも其の通り、各々自分の私慾を離れて國家の爲めと思つて遣れば、夫れが卽ち日本の國を守るものになり、尙ほ進んでは世界の爲めになるのである、ソコを能く心得て行かんければならない譯である。

宗旨の上で言うても其の通り、或は本願寺とか永平寺とか、種々樣々な宗旨に別れて居りまするが、其の宗旨は何から成立つて居るかと云ふと、矢張り因緣によつて立つて居るから、其の因緣を無視しないやうにして行かんければならぬ、平等的の考へを以て、どのお宗旨にも妨げのないやうに、どのお宗旨の爲にもなるやうにと云ふ考へを持つと共に、差別の上に於て、本願寺の末寺や信徒は本願寺の發達をするやうにせんければならぬ、永平寺の末寺や信徒は、永平寺の發達するやうに、それを忘れぬやうに遣つて行

かんければならぬ。

本願寺の事も、大變近頃は八釜しいことになつて居るが、大體本願寺と云ふものはどう云ふ成立ちになつて居るかと云ふと、これは日本の皇室と同じやうな具合で成立つて居る、根本を調べれば幾らか異つた處があるけれども、先づ大體の上に於ては殆ど同じやうな有樣で成立つて居る、そんなら皇室と云ふものはどんなものであるか、皇室と云ふものは我々の御先祖、我々の家長なんである、外國の皇室の成立とは違ふ、小さく言へば我々の親樣ぢやからして、天子樣は他人ぢやァない、其の天子樣の爲に日本の國と云ふものは出來上つて居るのである、天子樣が此の國にお臨みなされて、我々の先祖が其のお供をして參つて日本が出來上つたのである、彼の餘所の國のやうに、人民が出來て、其の內の一番豪い者が天子樣になると云ふものとは成立ちが違ふ、夫れだから日本

と云ふものはドコまでも天子樣の家である、國と云ふ時には天子樣が主なんである、昔には國と云ふことはない、昔の日本の書物には愛國と云ふ文字はない、愛國と云ふ時にはイツでも大和魂と云ふ文字が書いてある、君を慕ひ臣の道を盡すと云ふのが、大和魂である、昔は國と云ふことはなかつた、ところが外に色々の國があつて夫れと區別する爲め、我が國と云ふ言葉が出來、隨つて愛國と云ふ言葉も出來たのである、夫れだから詰り、愛國と云ふことは天子樣を大切にすると云ふ事なんである、天子樣を大切にして、天子樣の御發達爲さるやうにして行くのが夫れが卽ち愛國なんである、本願寺も矢張り夫れと同じ具合になつて居る、本願寺の法主と云ふものが主になつて出來て居る、そこで善光寺あたりとは違ふ、善光寺では大勸進がお守をして居るのであるけれども、誰れも大勸進目當にて參詣するものはない、三尊佛が有難いから、三尊佛を目當に皆參詣す

る、ところが本願寺ではさうでない、本願寺では御法主さんが有難い、御眞影樣も有難いけれど、御眞影樣も御法主樣も同じものになつて居る、御眞影樣も有難いが、御法主樣も有難いと云ふことになつて居るのである、夫れで本願寺が出來上つて來て居るのである、そこで皇室と同じやうな具合になつて居る、けれども御法主樣が夫れを能くお心にお入れなされて、さうして門徒の信仰を御引立て下さらぬやうなことがあつては可かぬのであるけれども、又門徒の方から御法主に向つて、斯うしようあァしようと云ふ考へを持つのも間違つた考へである、夫れも或は止むを得ないと云ふ事もあるであらうけれども、之を日本皇室に關係する上から云ふと、大變な關係の大い事かと思ひます、これは餘程斟酌をせんければならない、若しも本願寺の末寺や門徒等が自身の都合によりては法主を叩き出して了ふと云ふ樣なる考になれば、本願寺だけでは左程にもないけれども、夫れを國家の上で考へると、餘程考へものだと思ふ、人間と云ふものは段々事柄に慣れて來ると何んとも思はぬものである、初め蟻を殺したり蚯蚓を殺したりして何んとも思はぬやうになると、犬を殺しても何んとも思はぬやうになり、犬を殺して何んとも思はぬやうになると、今度は人間を殺しても何んとも思はぬやうになるものである、夫れで動物愛護などゝ云ふことを近頃は言ひ出した、宜い事である、動物に對して慘酷な心を持つて居るものは、必ず人間に對しても慘酷な心を持つ、人間に對して何とも思はぬやうな者なれば、仕へる主人に對しても何んとも思はぬ、自身と異つたものではないと云ふやうな考へを起す、夫れ位ならば未だ宜いけれども、其の心が段々ひどくなつて來ると、皇室に對しても同じやうな考へを持つやうになりはしないかと私は思ふ、そこらは矢張り末寺の者や門徒の者は能く斟酌しなければならぬ、今日總ての人が、此の

因緣と云ふことを一向重く見て居らない、夫れは矢張り佛法の聽きやうが足らないのである、佛法では此の差別と云ふことは深い因緣によつて現はれると云ふことを說く、夫れを今一時に現はれて來たものゝやうに思ふ、夫れでお互ひ日本の人間も、親に產んで貰つて、夫れで初めて日本の人民となつたと云ふやうな、薄い因緣ぢやと思うて居る、夫れぢやから、十年二十年だけの因緣と心得て、日本の都合が惡くなつたら、直ぐに御免を蒙らうと云ふやうな考への者が今日は隨分ある、下女下男でもさうである、半年や一年の關係であると、都合が惡ければ何時放出しても雙方が何とも思はぬ、夫れが關係が深くなると、そんな具合には可かぬ、たとへ一時は面白くないと思つても、放出すなど云ふとは土臺考へに起らぬ、私の家に六十年も居る下女があつて、横著で仕やうがない、困るけれども、さて放出して遣らうと云ふやうな考へは少しも起らぬ、關係が薄いとツイさう云ふ心が起る、佛法の上では、差別の現はれるのは、空間的の事情ばかりによつて現はれるものではない、空間的の事情と共に、時間的の事情とがある、今日我々が日本に生れて來て居るのは、唯だ自分の親に產んで貰つたと云ふやうな、極く薄い因緣ではない、此の日本に生れて來んければならぬ因緣が、前生前々生からあるのである、夫れぢやから日本の天子樣に、今日自身が御厄介になるばかりではない、前生に於ても御厄介になつたであらう、前々生に於てもお世話になつたであらう、其の世々生々の因緣によつて、今日初めて此の日本の聖天子の下に生れ來て、これまでにない御恩澤を受けることになつたのである、中々容易ならぬ御蔭を蒙つて居るのであると、斯う云ふ深い因緣を考へて見りやア、自然まさかの時には財產も身命も投げ出して天子樣の御爲に働くと云ふ考へが起つて來んければならぬ、親子の間も其の通り、今日多くの人の

中には、親が勝手に産んで勝手に育てたのであるから、恩も何もないと云ふやうな事を言ふ者もあるけれども、夫れは唯だ空間的だけで考へるからさう云ふやうな考へも起るであらうけれども、イヤさうではない、今日親子の縁を結ぶと云ふものはどの位深い因縁があるのであらうか、前生前々生に於て、淺からぬ因縁によつて今生は親子の關係を結ぶことになつたものであると云ふことを思へば、どうしても御恩報謝をせんければならないことになる、夫婦の間も兄弟の間も其の通りで、世々生々の因縁によつて現はれて來たものであると思へば、苟且にも中違の離縁のと云ふ事も出來る譯のものぢやアないのである、總てがさう云ふ深い因縁の上から現はれて居るのであるから、其の事を一つ思うて行かんければならぬ。

第十五　日本の佛教（九）

篤敬三寶の極意

聖德太子の佛法では、篤敬三寶と云ふことが一番大切なことになるのである、其の篤敬三寶と云ふのは、一ト口に言へば前申す如く、佛の慈悲を眞實に有難く信ずることである、聖德太子はドコにそんな事を仰せられたか、篤敬三寶と云ふことは十七憲法に說きなされてあるけれども、其の篤敬三寶と云ふことはどう云ふことであるか、其の意味合を明かにお示しになつて居る處は見當らぬやうである、どう云ふ處からして太子の仰せられた篤敬三寶は、如來の慈悲を眞實有難く戴くと云ふ、極く容易い事に解釋することが出來るのであるかと申すと、勝鬘經の中に此の篤敬三寶と云ふことが詳しくお示しなされてある、聖德太子が、勝鬘經を御講釋なされたのは、一つは此の篤敬三寶と

云ふことを、其の勝鬘經の上でお示しになる譯であつたであらうと思ふ。

勝鬘經の上では三寶と云ふことを段々お說きなされて、三寶と云ふは詰り一の佛寶である、三寶と云ふのは佛と法と僧とであるが、法と僧と云ふものは、眞の我々の便りになるものではないのである、眞に便りになる、本當に我々の力になるものは、此の佛寶卽ち如來樣より外はないことである、斯う云ふことをお示しになつて居る、これは少し文章が長いけれども序でに申上げます。

常住歸依者謂如來應正等覺也。法者卽是說一乘道。僧者是三乘衆。名少分歸依。是故此二歸依非究竟。是有限歸依。若有衆生如來調伏歸依如來。得法津澤生信樂心。歸依法僧此二歸依。非此二歸依是歸依如來。歸依第一義者是歸依如來。此二歸依第一義是究竟歸依如來。

ズーッと三寶の事をお說きなされて、一番終ひに右の御文があるのである『常住歸依とは如來應正等覺なり』如來樣に歸依するのは、常住歸依と謂はるゝものである、三寶と云ふ中で法と云ふのは、これは一乘の法を說くことである、僧と云ふのは三乘衆のことである、『少分歸依と名づく、是の故に此の二つの歸依は究竟の歸依にあらず』此の法と僧との歸依は究竟した歸依ではないのである、少分歸依と名づく、頓との押し詰つた處の歸依と云ふものではない、少分の歸依と名づくべきものである、『是れ有限の歸依なり』限りある處の歸依である、或る處までは便りになる、或る處までは我々に救濟の法を與へて下さるが、ドコ〳〵までも我々が救濟せられ、ドコ〳〵までも我々の落付き處となり、我々の力となるべきものではないのである、ところが『若し衆生あつて、如來に歸依すれば、法の津澤を得て信樂心を生ずる』若し玆に衆生が

あつて、如來に調伏せられて、極く俗な言葉で言へば征伏せられるのである、如來樣の爲に我々が征伐降服せられて、モウ自身と云ふものをスッカリ打ち棄てゝ、如來樣の力一つを賴りに思ふのが、如來に調伏せられて如來に歸依するのである、ところが自身に少しでも力があるやうに思ひ自身に少し取り柄のあるやうな考へを起して、夫れを如來樣の力に添へて救て貰はうと云ふやうな考へのある間は、まだ我々が如來樣に對抗して行くと云ふ氣味がある、夫れでは征服せられ切つて居らない、夫れでは可けない、如來樣に征服せられなければならぬ、トコのトンまで自分の方には役に立つものはないと云ふことになり、如來樣のお力より自身の助かる力はないと云ふのが、卽ち如來樣に調伏せられたのである、如來樣ひとりを便るより外はないと、自身をスッカリ打ち棄てゝ、如來樣のお力一つを便ると云ふことになつた處で、『法の津澤を得て信樂心を生ず』如來

樣の御恩澤に浴する處からしてその心の上に津々乎として無限の興味が生ずる樣になる、そこで信樂心を生ずと云ふ、信樂と云ふは、眞宗では始終言ふことで、眞宗の肝心第十八願の中には、至心信樂欲生とお說きなされてある、卽ち他力の信仰のことである、これは說敎の上でイッも聽聞になつて居ることである、信と云ふのはどう云ふことであるか、佛のお力一つが便りになつた處が卽ち信である、佛のお力を少しも危ぶむ心の起らない、疑ひ心の起らない、佛のお力一つか自身の當てになつたのが卽ち信樂である、疑はぬと云うても、世間の言葉で言ふ疑ひが晴れたと云ふのとは少しく振合ひが違ふ、『先達て汽車が衝突して、大變人が死んださうだ』『ハーアさうかいな』其の事に就ては少しも疑ひはない、けれども、『さうかいな』と言うて、餘所の事と思うて居る、自分の心の中には、格別何んの感じもない、唯だ『氣の毒な』と云ふ位に過ぎない、自分はそ

んな目に遭はぬものぢや、遭ふ氣遣ひはないと思うて居る、今信樂と云ふのは、斯樣のことでない、他人の事として聞いたのではない、自身の大事に就て、佛の力が便りになり佛の御慈悲に疑ひの晴れたのである、此の落ちる者が此度は愈々淨土詣りをさせて貰ふと云ふ、自身の淨土詣り、自身が悟りの境界に入ると云ふ上に疑ひが晴れたのであるから、其の疑ひの晴れた處は、何んとも言うて見やうがない、興味が津々として湧いて來ると云ふので樂と言ふ字が付く、そこで信樂と言ふのは、如來樣に歸依した處の心持ちを誠によく言ひ現はして居る、平生信心々々と云ふことを言ふけれども、信心と云ふだけでは右の意味が文字の上に現はれにくい、信樂と云ふと、其の意味合が文字の上に現はれて、何んとも申しやうのない、張合の好い、願はしい心のするのが卽ち樂である

そこで如來に調伏せられて如來に歸依すれば信樂心を生ずと云ふ、此の罪惡深重の者が佛のお力一つで、此度は淨土詣りをさせて頂く、此度は悟りの境涯に入らせて頂くのであると、斯うなつたのが、如來に歸依した信樂心の生じたのである、其信樂心の生じた所で法と僧とに歸依すると云ふことになれば、夫れは單に法と僧との二つの歸依にあらずして、卽ち如來に歸依したのである、法が有難いと云ふのも、僧が有難いと云ふのも如來に調伏せられて、信樂心の生じた上で法と僧とに歸依するのであるから、詰る處如來に歸依したのが、法の上にも現はれ、僧の上にも現はれるのである、さう云ふ處から三寶を敬ふと云ふことにならなければ、本當に三寶を敬ふと云ふことにはならぬ、眞に如來樣のお力一つが便りになつたなれば、其の有難いと云ふ上から、法に對して尊敬心を起し、僧に對して尊敬心を起す、夫れが篤敬三寶、夫れで篤敬三寶を推し詰めて云ふと、如來樣のお力一つが便りになつて、如來樣に打ち任すことになつた處が夫れが篤敬三

寶、夫れで、歸依第一義とは是れ如來に歸依するなり、そこで如來に歸依するものは取りも直さず第一義に歸依するのである、第一義とは何であるかと云ふと、佛敎の言葉で一ト口に云ふと、眞如であるとか、法性であるとか云ふのが、これが第一義である、卽ち我々の頓との本性の處が夫れが卽ち第一義、我々の頓との本性と云ふものはどんなものであるかと云ふと、マア世間に較べ物のない結構なものである、夫れをお悟りなされたのが如來樣、我々はそんな結構なものを持つて居りながら、そんな結構なものゝあることを知らぬ、ところが今如來樣に調伏せられて、如來樣のお力一つに任せ、如來樣のお心一つを當にすると云ふことになると、其如來樣は第一義を悟つたお方であるからして、如來樣に打ち向うた處が、取りも直さず第一義に歸依すると云ふことになつて來る我々の此の本性までも貫いた處の光りになる、夫れで此の信心と云ふことは何んでもないやうであるけれども、何んでもないものではない、途轍もない鴻大なものである、我我の心の中に如來樣の光りを便りにして、唯だ命の切れた時に、佛力によつて往生をさせて頂くと云ふだけの、淺墓な、誠に何んでもない心のやうであるけれども、其の心が矢張り第一義に歸依した心で、我々の本性までも、如來の本性までも通り拔けて居る處の心になるのであるから親鸞聖人は、『眞如一實の信海なり』と仰せられたのである、夫れで『此の二の歸依と第一義とは、是れ究竟歸依如來なり』此の二の歸依と云うても、詰り如來に歸依する處から法僧に歸依すると云ふことになる、そこで其の法僧に歸依するのは如來に歸依したのである、夫れが取りも直さず第一義に歸依するのである、よつて此の二つの歸依と第一義とは、究竟歸依如來と云ふことになるのである、これこそ本當に佛樣の力を便りにするのである、これが本當に自身の力になる、之れを除けて自身

の究竟の力になるものはないのである。

此のお言葉の如きも、見やうによつては此のまゝ矢張り眞宗の他力の精神と異つたこゝとはないのである、そこで親鸞聖人は教行信證行の卷に『二乘三乘あることなし、二乘三乘は一乘に入らしめんとなり、一乘は卽ち第一義乘なり、唯だ是れ誓願一佛乘なり』と、卽ち勝鬘經の御文をお採になつて之を誓願一佛乘卽ち他力法に引付られてある、之れによつて見ると、聖德太子が篤敬三寶と仰せられたのは、表向き明かには現はれて居らぬけれども、押し詰めて見ると云ふと、親鸞聖人のお弘め遊ばした他力本願のお いはれを信樂すると云ふより外はないのである、そこから眺めると、聖德太子も矢張り他力の本願のおいはれをお示しになつて居るのである、そこで『誓願不思議を現はして』と親鸞聖人が御讃嘆になつて居ることである。

斯くの如く、如來に調伏せられて、自身の凡夫心をスッカリ打ち離れて了うて、如來のお心を貰うて自身の心にすると云ふことになりやア、そこには一毫の汚れた處もなければ、小分の缺けた處もない、眞に心底から清淨の心を以て此の世界の事を扱つて行けば、此の世界の事が皆佛法に適ふのである、山の中へ這入る必要もなければ、谷の間へかゞむ必要もない、自身の心を打ち棄てゝ、如來のお力一つで往生をさせて頂くと、眞に佛のお慈悲が領受せられ、其のお慈悲の上から今日の職業をさせて頂くと云ふことになれば、職業々々が皆御恩報謝と云ふことになる、喜びの上からして日日の職業をすると云ふことが出來る譯である、けれども實際に於てそんな具合には中々行かない、成程他力のおいはれを聞けば有難くなる、佛樣のお慈悲は有難う思ふけれども、併し日々の仕事をする上に於ては、中々そんなやうな具合に、朝から晩まで一念も、慾心の起

らぬやう、利己心の起らぬやうにして、唯だ御恩報謝御恩報謝と遣つて行くと云ふ、そんなことは出來はしないぢやないかと云ふに、成程夫れは出來ない、出來ないけれども、佛の御恩を思はせて頂けば、其の思はせて頂いた時は清淨である、忘れて居る間は、凡夫心も起らうけれども、慾も起るであらうけれども、うるさい心も浮ぶであらうけれども、一ト度如來樣の御恩を思はせて貰ふことになると、スツカリ其の間は打ち忘れて了ふ『念々稱名常懺悔』汚い心が起りはするけれども、起つた時には佛の御恩で直ぐに打ち消して了ふ、又起れば又如來の御恩を思はして頂く、丁度湯の流れる處へ雪の降るやうなものである、雪が降るが早いか直ぐ消えて了ふ、そんなやうな具合で、色々な妄念が起り、色々に煩惱も起り、うるさい心も、慾の心も起りはしまするけれども、起るが早いか御慈悲の湯の中へ落ちて直ぐに消えて了ふのである、そこで念々稱名常懺悔稱名を唱へながら自分の職業をさせて頂くと云ふことになれば、時々は汚い心も起りはするけれども、起る後から打ち消されて、御恩報謝と云ふことに適ふやうになるのである、商賣をしながら百姓をしながら、皆一々法の實相に適ふ譯になつて來るのである。

斯う云ふ處は支那の方ではまだハツキリ現はれて居ない、日本に來て初めて此のおいはれが明かに現はれると云ふことになつたのである、乍併聖德太子の上ではまだキツパリと現はれ切らぬのである、聖德太子の思召しはさうであるけれども、夫れを明かにお示しになると云ふ處までは行かなんだ、夫れが段々と時を經、世を經て、追々と明かに現はれて來ることになつて、遂に親鸞聖人が明白に其邊の處をお示し下さるやうになつて、我々は其の御恩澤に浴することになつたのである。

さて斯う申すと、夫れはマア大變に有難いやうである、有難いやうであるけれども、其の佛樣があるかないか分らぬ、佛樣がホンマにあり、淨土がホンマにあると云ふことなら、夫れは今のやうに誠に有難いことであらけれども、佛樣があると云ふことはシッカリ分らぬ、淨土があると云ふことも、どうも我々には信じられぬ、斯う云ふ人が今日はドコへ行つても多いやうである、けれども其の事も此の勝鬘經の中にお示しなされてある、

三種善男子善男女人。於二甚深義一。離二自毀傷一。生二大功德一。入二大乘道一。何等爲レ三。善男子善女人自成二就甚深法智一。若善男子善女人成二就隨順法智一。若善男子善女人。於二諸深法一不二自了知一。仰推二世尊一。非二我境界一。唯佛所レ知。是名二善男子善女人仰推二如來一。

これは、三種の善男子善女人が、皆同く甚深の義に於て佛法を知り、自分の考へを離れて、大功德を生じ、大乘道に入る、卽ち如來の法を信じ、悟りに入ると云ふことになると云ふのである、其の三種の善男子善女人と云ふものはどんなものであるかと云ふと、

先づ第一には『善男子善女人自ら甚深の法智を成就す』この善男子善女人は、自身が本當に修行をして、其の修行の上からして、自分の心の中に甚深の智惠を成就す、卽ち佛樣を自身の目の前に拜むことも出來、淨土を自身の目の前に實現することの出來る智慧を成就した善男子善女人、これは餘程修行をせんければならぬが、これであつて見ればどうも斯うもない、自身が實見するのであるからして、美くしう如來の法を信ずることが出來る。

第二は『若くは善男子善女人隨順の法智を成就す』善男子善女人が、自身が飽くまでも修行をして、自身の目で現實的に佛を拜み、自身の識域中にて淨土を見ることは出來

ずとも、本當に修行して甚深の法智を成就した如く其の甚深の法智に隨順する智慧を得る、目のあたり實見することは出來ずとも、どうしても如來はなければならぬことである淨土はなけらねばならぬと云ふことが、飽くまでも佛法の學問の上、道理を追究した上からして、いよ〳〵斯うなけらねばならぬことであると云ふ智慧を成就して、少しも夫れを疑ふ心のないと云ふのが、第二の隨順の法智を成就すると云ふ方である。

扨此の智慧と云ふのは、今日の學校で拵へた位の智慧では、中々隨順法智と云ふ處へは行かない、矢張り佛法の上で言ふ如來樣のお說きなされた處の道理をよく研究し、其の深い處のいはれを能く領會して、どうしても佛はなけらねばならぬものである、淨土はどうしてもあるものであると云ふことになつて來たのが、隨順法智を成就したのである、世間の學校で拵へて貰うた智識などを持つて居ると、却て如來樣のお說きなされた法が分らぬやうになつて來る、世間の智慧の爲に妨げられ、佛のお說きなされた法が分らぬやうになる、昔の人の言葉に『小智菩提を害する』と云ふことがある、小さい智慧があると、却て菩提の妨げをするやうになると言つて居る、今日の學校の智慧は皆小さい、自分の眼に見え、自分の耳に聞える、卽ち自身の實驗の出來る部分だけで考へ込んで行くと云ふのが今日の學問である、其の位の學問を土臺にして、さうして佛のお悟りの事を考へた處が、分る譯はないのである、モウ一つ奧深い處に心を据ゑて、如來のお說きなされた法を讀み、眞面目に研究して見ぬと云ふと、佛法の光りは分らない、佛のあることも淨土のあることも分らないものである、ところが隨順法智を成就したものなればモウ疑はぬ、自分の眼には淨土は見えないけれども、如來樣のお說きなされた法を伺ふと、どうしても佛樣はなけらねばならぬものである、淨土はなけらねばならぬも

のであると云ふことになつて、そこに一點の疑ひも何もないのである、夫れが卽ち隨順法智を成就したのである。

第三番目は『若くば善男子善女人、諸の深法に於て自ら了知せず』佛のお說きなされた處のおいはれは自分には薩張り分らぬ、無論佛樣や淨土を見ることは出來ぬのである夫れのみならず、第二番目の善男子善女人の如く、いよ〳〵如來樣はなけらねばならぬ、淨土はなけらねばならぬと云ふことも、學問や道理の上からも薩張り分らない、そんならどうするのであるか、『仰いで世尊を推して、我が境界にあらず、唯だ佛の知ろしめす所』淨土の境界はどんなものであるとか、佛樣のお姿はどんなものであるとか、そんな事は我々の知るべき境界ではない、我々が知らうとして知れるものではない、如來樣が已に御實驗なされ、如來樣が既に見屆けになつたからして、間違ひないと信ずるより外

はないのである、其の如來樣のお言葉に間違ひはないから、其のお言葉を信ずる、夫れが卽ち『仰いで世尊を推して、我が境界にあらず、唯だ佛の知ろしめす所と云ふ、是れを善男子善女人仰いで如來を推すと名づく』、我々凡夫の境界ではないのであるからして、どんなものやらどんな理窟やら、そんな事は我々には分らない、唯々お釋迦樣が自分に御實驗の上で仰しやり、親鸞聖人も御自身に御實驗遊ばした處からしてお示しなされたのであるからして、之れを信ずるより外はないのである、お釋迦樣は好い加減な事をお說きなされたのではない、『此の利を見るが故に此の言を說く』と仰せられてある、唯だ理窟で仰しやつたのではない、自身が實驗して、間違ひのないことを仰せられたのであるからして、理窟は何か知らぬ、譯柄は何か知らぬけれども、佛のお力によつて此の度は助けて頂くのであると言ふ佛のお言葉であるからして、夫れを當てに信ずると云

ふのが、第三番目の善男子善女人である。

そこで表面に於ては、第一番目の、修行をして掛ると云ふのは、大變偉いのである、又道理の上から研究して、いよ〳〵有ると云ふことを知るのも偉いのである、然るに第三番目は、誠に詰らぬ、愚な話であるけれども、其の結果はどうかと云ふと、此の三種の善男子善女人と云ふものは、皆同じやうに大功德を生じて大乘道に入ることが出來るのである、其の中でも此の勝鬘經に於ては、第三番目の善男子善女人に最も重きを置いてあるやうである、夫れで此の一番終ひには『是名三善男子善女人仰推二如來一』と結びの言が付いてある、ぢやから理窟を八釜しく言ふ必要もない、目で見るとか耳で聞くとか云ふ、そんな必要もない、如來は嘘を仰せられたのではない、御實驗の積んだ佛の仰せられたことであるからして、其のお言葉一つを目當に信ずるより外はない、夫れが本當

の信仰である、夫れを今日の小さい學問を楯に取つて、何んの彼んのと言うて居つては、イツまで經つても解決の付くものではない、一時は信仰が出來るやうでもあるけれども學問が變りや又信仰も變つて來る、イツまで經つても、死ぬまで自身の心の中に決心と云ふものが出來る譯はないのである。

元來信仰と言ふものは、自分の學問を土臺にして居つてからと云ふものは、信仰の出來るものではありませぬ、然るに世間の學問が段々進んで來ると、どうしても其世間の學問に動かされる、世間の學問と云ふものは始終動くものである、今でも日々學說と云ふものは變つて行く、どの科の學問でも、五年十年と少しも變らずに居ると云ふものはない、どの學說でも日々夜々に變化して行く、進むのか退くのか分らないが、兎に角變つて行く、そんなものを追はへ廻つて居れば、一生涯追はへ廻さければならぬ、そこで

世間の學問を土臺にして居ては金剛不壞の信仰と云ふのは、どうしても起る譯のものぢやァない、信仰と云ふものは佛教の上で言へば、卽ち佛樣のお言葉を眞受けに受けるより外はない、經に聞其名號と說き、善導大師が唯信佛語と云へるは此譯である、親鸞聖人の如きもさうである。

念佛して彌陀にたすけられまひらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信ずるよりほかに別の子細これなく候

信仰と云ふことになれば、佛のお言葉を一途に信じて行くより外に信仰が立つ譯のものぢやァない、早く言ふと、其の實驗あり、經驗あるお方のお言葉であるから夫れを信ずる値打があるものなんである、夫れを當てにして行くより外に、信仰と云ふものは立つ譯のものぢやない、哲學では斯う言ふ、科學では斯う云ふと、そんな處から考へ込んで

佛樣はこんなものである、淨土はこんなものである、或は自身が死んだらどうなるものであるとか、あァなるものであるとか、そんな事を考へて居ると、學說の變る度毎に變つて行く、そんな事で信仰と云ふものゝ出來る譯はない、乍併世間の學問が盛んになつて、ドコ〳〵までも夫れがズッと弘まつて來ると云ふと、どうしても夫れに動かされて、成程と云ふやうなことになつて來る、世間の學問は我々の知つて居る經驗して居る部分だけで說を立てゝ行くから、我々の頭に這入り易いのである、佛教の上に說かれてあることは、自身の經驗の及ばぬ處である、夫れぢやから、自身の經驗の及ぶ範圍內に於て、これは斯う云ふものぢやと云ふやうなことになると、成程さうかも知れぬと云ふやうなことになつて來る、そこはどうも困つたものである、けれども私共は其邊に就ては斯う云ふ信仰である、佛樣の仰せられた事は間違ひはない、佛法に說かれてある事

は間違ひは決してない、あれは實驗の上からお說きなされた、經驗の上から說かれたものである、我々は實驗をしないから、どうぢや知らぬ斯うぢや知らぬと思ふやうであるけれども、說かれたお方は實驗であつて間違つた事はないのである、そんなら世間の學問はどうであるか、佛說と違ふでないかと云に、世間の學說は何分今日はまだ道中である、段々佛樣の仰せられ通りになつて來る、今日はまだ佛樣の仰せられ處まで世間の學者の智識が屆かない、經驗が夫れまで積まれないのである、今の間はこんな事を言つて居るけれども、段々經驗が積めば積む程、佛樣の仰せられた通りになつて來る、そんなものに動かされる必要はない、乍併今日世間の學者の言つて居る事、知つて居る事も、自分で幾らか研究するが宜いけれども、夫れは研究をして見るまでの事である、自分が今日の學問として考へるだけのことである、自身の信仰ぢやない、今日の學問では斯う云ふことを言つて居る、彼ア云ふことを言ふが、段々これが發達して、頓との極點に至ると、矢張り佛樣の仰せられた處へ行かんければならない、夫れまでは道行きに過ぎないと、私は斯う云ふ信仰である、事實又さうらしい、段々考へて見ると、追々佛說に近寄つて來る、學問の方の側でも事實の上でも、段々さうなつて來るやうに私は思ふ……これは私の考へが間違つて居るかも知らぬが……哲學の上でもさうである、段々と此の佛法に似寄つた哲學が起つて來る、今日日本でドコへ行つても持て囃されて居るベルグソンの哲學の如きは、佛教で說く處と大變似寄つて居る、佛教を知つて居る者から見ると、まだ行き屆かぬ處がある、佛教を知らぬ者からは、珍らしい哲學ぢやと今日言うて居るけれども、我々佛教を知つて居る者では、ハハアあそこまで遣つて來たが、まだあそこに足らぬ處があると、斯の位に思つて居る、科學の方でもさうである、心理學の方

の側の上で言ふと、是れまで我々の心と云ふものは、此の頭の中に働くものと云ふ外知らなんだ、ところが催眠術と云ふやうことが現はれて來ると、我々の心と云ふものはどれ程廣く働くものやら分らないと云ふことになる、そんな大きな心がドコにあるかと云ふと、此の心と云ふものは矢張り二つある、二つと云ふとをかしいが、平生使つて居る心ととッときの心とがある、平生使うて居る心は始終働いて居るから、とッときの心が分らぬのである、平生使ふ心が鎭まるところへ、とッときの心が現れて來るのである、斯う云ふ振合ひになりかけて來て居るのである、夫れがハヤ餘程佛法に近寄つて來た、學問ではないけれども、事實上のさう云ふことが現はれて來て居る、よく世間には、神樣の御託宣を蒙つたとか、或は佛樣のお指圖を蒙つたとか、云ふやうなことがあつて、そんな馬鹿な事がと言うて居つたが、段々經驗して見るとどうも不思議なものである、暫く無心になる、其の無心になつた瞬間に、不思議な力が自分の頭の中に働いて來る、早く云ふと、お經文が現れて來る、卽ち佛敎の深い道理が現はれて來る。

そんなやうな事はこれから研究したらどう云ふことになつて來るかも知れぬ、まだ研究は積まぬけれども、事實はさう云ふことが現はれて來て居る、そこから言ふと、どうしても此の我々より外に何かなけらねばならぬ、今日は世間の人も大分ソコに氣が付いて來た、此の間も築地で布敎講習會を開いて、其の時の講話に千里眼や念寫などの話があつて、どうしても自身以外人間已上の物がなけらねばならぬと云ふ事を述べられた學者もあつたさうである、そんなやうな具合で、段々佛法の方に近寄つて來ると思ふ、理學の方の側で言ふと、前も申した通り、ラヂユームと云ふ眼に見えないやうな光りが發見せられた、夫れで病氣を直すと肉の組織が變つて了ふと云ふ、再び病氣が起るかどう

か知らぬけれども、兎に角一時は夫れで治るらしい、そんなやうなことで、佛法の中に說いてある佛樣の御光明などと云ふ、眼にも見えない、軀にも感じない光りと云ふものがなければならぬと云ふことが信ぜらるゝやうになつた。

夫れから今日、昔からあつた事で、研究の出來ない、說明の出來ない事が非常に澤山ある、これまでは、そんな事はと、頭から馬鹿なと言つてけなして居つたものであるが近頃は追々實驗して見ると、成程夫れが實際に於て行ふことが出來るものであると云ふことが分つて來た、彼の火渡りと言ふ事などは、足の毛一本も燒けぬ、遣つて見れば必ず出來るが、夫れはどう云ふ譯であるか、學者によつて研究されても今に說明は出來ぬなんでも初めに鹽を撒く、あの鹽の加減であらうと云ふ者もあるが、鹽の加減か何か知らぬけれども、兎に角實地に於て行ふことが出來る、夫れだから、お互ひの智識と云ふものは極く詰らぬものである、こんな智識で研究した位な事を土臺にして居つてからと云ふものは、確かりした信仰の起る譯のものではない、夫れで私は始終言ふ、今日の學問がどれ程細かに出來ての出來る譯のものでもも、どれ程微細に出來ても、牛肉食つて舌打するやうな人間の研究したことであるから牛肉を食べぬ佛樣の仰せられたことが分るものでない、山の中で久しく修行をして居つて、此の世間へ降りて來ると、臭くて仕やうがないと云ふ、實際精進潔齋して居ると身體の模樣が變つて來るからして其の心の模樣も變る、夫れで偶々此の世間へ降りて來ると、臭くて仕やうがない、迚も長くは居られない、さう云ふ譯で、牛肉食つて研究した事は當てになる譯はない、だからお釋迦樣の仰せられた事は、皆御實驗の上から仰せられたことであるから、今日の者ではどう云ふ譯かと云ふことは說明は出來ぬけれども

皆實際に行ふことの出來る事ばかりである、そこで、今日の學問と云ふのは私の眼から見ると、追々佛法に近寄つて來るやうである、道行きなんである、本當の處は矢張りお釋迦樣のお說きなされた處が本當であるから、其の處まで世間の學問が行かなければならぬ、此の如く信仰を持つて行きさへすれば、世間の學問の爲に動かされると云ふことはない、お釋迦樣の仰せられたことは間違ひはないとして、世間の學問は自身の慰み同樣に遣つて居れば、世間の學問の爲めに動かされると云ふことはない、夫れだから各宗の敎育と云ふものは全るで間違つて居る、今日のやうな敎育の仕方では、佛敎を破壞するやうに出來て居ると言つても宜い、各宗に仰山な學校があるが、其の中學であらうが大學であらうが、皆んな佛法を叩き破るやうに出來て居る、事實其の通りである、これは大變に間違つた話なんである、どうしても此の宗門の學問と云ふものは、初めから佛

法で遣らんければならぬ、人間と云ふものは初めが大事である、所謂先入主となる、子供の時分に佛法をよく聞かせ、さうして、其の餘暇には、世間の事も學ばせる、普通の事も學ばせる、斯う云ふやうにして行かんければならぬ、夫れだから以前から私共はさう云ふ意見であつた、どうしても宗門の學問と云ふものは宗門風に拵へんければならぬ、そこで佛敎的の智識を養うて來んければならぬ、坊主と云ふものは寺があるから、食ふ事にさう難儀をすると云ふことはない、世間の者はさうはゆかぬ、自身で食つて行かんければならぬから、中學を卒業し大學を卒業して自活の途を開かんければならぬが、坊主は寺を持ち門徒を持つて居るから、食ふ事に困る氣遣ひはないのであるから、さう中學を卒業せんければならぬ必要もなければ、大學を卒業せんければならぬと云ふ必要もない、唯だ徵兵猶豫の事であるが、あれは宗門の方の學校で徵兵猶豫の免許を取

ることにして……少し骨は折れるか知らぬが……矢張り坊主は宗門の學校で育て上げると云ふことにせんければなるまいと思ふ、今日のやうな遣り方は餘程考へものである、兎に角佛教の智識と云ふものが、頭の一番下に固まつて居ることにならんければ行くまい、さうせんければ信仰と云ふものが始終世間の學問の爲めに動かされて了ふ、頭の中の一番下の土臺を、佛教の智識で固めて置けば、どんなものを持つて來ても差支へない、一番下の土臺が固つて居らぬと、少し變つたものを持つて來ると、直ぐに動かされて了ふ、その樣なことで佛教の弘まる氣遣ひもなければ宗旨の盛んになる氣遣ひもないのである、これは僧侶としては餘程考へんければならぬ事であらうと思ふ。

第十六　日本の佛教（十）

傳教大師の大乘圓頓戒

偖聖德太子のお話を前來致して來たが、聖德太子のお話は此位にして置く、聖德太子の思召し通りに、日本に佛教がズッと順調に弘まつて來たかと云ふと、どうも物と云ふものはさうは行かない、これが順調に弘まつて來たならば、日本の佛教は餘程立派なものになつて居る筈である、然るに聖德太子が薨去になると其の跡を繼ぐ者がない、モウハヤ聖德太子の晩年に、澤山朝鮮や支那から僧侶が這入り込んで來た、其の朝鮮や支那から來た僧侶が、日本に段々佛法を弘めることになつたものであるからして、その中タマには、行基菩薩のやうな道昭律師のやうな人が出て、聖德太子のやうに社會事業を起し、慈善事業を起しはしましたが、一般に慨して、支那流の佛教になつて、所謂講釋

佛教である、講釋を上手にすると朝廷から赤い法衣を下さる、金襴の袈裟を賜はると云ふので、到頭僧侶の信仰と云ふものは廢つて了つて、信仰があつても無くつても構はぬ、研究をしてお經の講釋を上手にすれば、僧位であるかとか僧官であるとか、朝廷から賜はると云ふので、唯だ其の方のみに走つて了つて、社會に向つての感化と云ふものは一切なくなつて了つた、一切感化がなくなつた結果はどうなるかと云ふと、道德が廢つて了ふ、道德が廢つた結果はどうかと云ふと、政治が行屆かぬ、租稅も取れないと云ふことになる、夫れが奈良朝の末の有樣である。

そこで奈良朝の末に至つて政治を改革せんければならぬが、夫れにはどうすれば宜いかと云ふと、先づ第一に佛法の改革をせんければならぬと云ふこゝになつた、佛法と政治とは一致であつたから、桓武天皇は政治の改革を遊ばし、傳教大師は佛法の改革をせられたと云ふので、桓武天皇と傳教大師とが腹を合せて此處へ出て來て、政治と佛法との改革を遣りかけた、其の改革の出來上つた時が平安朝の初めで、政治の改革をするには先づ都を遷さんければならぬ、南都に居つて、同じ建ち物で、同じ處に居つて改革は出來ない、改革と云ふものは妙なもので、一軒の家の改革をするのも、舊の通りの家に居り、舊の通りの生活をして居りながら改革をすると云ふことは出來ない、物の改革と云ふものは根柢からせんければ出來るものではない、そこで桓武天皇は第一番に都を山城にお遷しになつた、平安朝と云ふものが其處に立つことになつた、傳教大師は是れまで弘まつて居らぬ處の新らしい佛法をお立てなさる、と云ふ譯であるけれども、其の新らしい佛法と云ふのは何んであるかと云ふと、表は天台宗と云ふ名で、實言ふと聖德太子の佛法を再興したのである、前に申す通り、奈良朝の佛法と云ふものは、所謂世間と離

れたものになりかけた、世間に少しも實際の感化と云ふものを爲さぬものになつて、唯だ金欄の袈裟を掛け、紫の法衣を著てお經の講釋をすると云ふやうなことになつて來たものであるからして、夫れでは可かぬ、夫れだからして、此の佛法を再興すると云ふには、矢張り佛法を活きたものにして、實際物の間に合ふやうにせんければならぬ、卽ち聖德太子の佛法は夫れである、其の精神を失うたのが今言ふ支那流の佛教である、玆に於て佛教の改革をすると云ふに就ては、是非共聖德太子の佛法を再興せんければならぬ譯である、傳教大師は斯う云ふ處に目が著いた、そんな事は好い加減に言ふのであらうと思ふ方もあらうが、夫れにはチヤンと證據がある、これは從來餘り氣の付かなんだことでありますが、傳教大師がまだ叡山をお建てなさらぬ前に、河內の磯長の聖德太子の御廟へ御參詣なされた、其の時に御獻納になつた詩が遺つて居る、其の詩は二首か三首あつたものださうですが今は一首しか殘つて居らない、其の詩は、私は微弱な者でありますから、どうぞ私を加護して、私の志の成就するやうになされて頂きたいと云ふ意味であつて、其の詩には序文が付いて居る、卽ち

今我法華聖德太子者。卽是南岳慧思大師後身也。廐戸託生汲二引四國一。請二持經於大唐一興二妙法於日域一。木鐸振二天台一。相二承其法味一。日本玄孫興福寺沙門最澄雖レ愚願弘二我師教一。不レ任二渴仰心一。謹奉二一首一

內海求緣力、歸二心聖德宮一、我今弘二妙法一、師教令二無窮一、兩樹隨春別、三卉應レ節同、願惟使下圓教、加護助中興隆上。

と云ふのである、然る處時勢と云ふものは矢ッ張り忘れては可けない、傳教大師は誠に具合よう行つた、と云ふのは、聖德太子は法華經をお弘めなされたけれども、聖德太子

宗と云ふ御宗旨はないからして、聖德太子宗と云ふものを拵へる譯には可かぬ、さうかと言つて、自分に考へた宗旨を弘めたのでは人が承知しない、どうしても國民の評判の宜いものを持ち込んで來んければ可けない、ところが恰度其の時は支那で天台宗が盛んに起つた時である、天台宗は初め天台大師によつて開かれて、其の後稍々衰へて居つたのを、荆溪と云ふ人によつて再興されて、丁度其の時が支那で非常に盛んであつた、さうして其の時分日本人は支那に於て盛んになつた物は何んでも歡迎する、今日西洋の文物が、一も二もなく宜い物として歡迎さるゝと同じ譯である、さうして此の天台宗を調べて見ると、どう云ふお宗旨であるかと云ふに、法華經を弘めるお宗旨である、法華經から出來上つて居る、さうして而も天台宗の二番目の祖師南岳の慧思禪師は、日本の聖德太子の前身であると云ふことが、日本に於て深く信ぜられて居つた、これは敢て日本で言ふのみならず、支那でもさう云ふ評判があつた、是れは聖德太子の傳記にも載つて居つて、小野妹子が隋に使ひに行く時に、聖德太子が『おれが前の生に於て讀んだ處の法華經が南岳にある筈である、取つて來て呉れえ』と仰せられたと云ふ、夫れは嘘か本當か知らぬが、兎に角其の時分に、支那でも日本でもさう云ふ評判が高くて、聖德太子は天台宗の第二番目の御祖師樣南岳の慧思禪師の生れ變りであると云ふことを專ら評判した、して見ると天台宗は取りも直さず聖德太子の佛教なんである、ぢやから之れを持つて來て此の日本佛教を改革せんければならぬ、斯う云ふことになつて來た、大變都合の好いことであつた、そこで天台宗と云ふ名前で表に立つと云ふことになつた、夫れでなければ人が尊敬しない、然るに日本にては今支那に於て天台宗が盛んであるさうな、大變結構なお宗旨であるさうなと云ふやうな鹽梅式であるから、其の結構な天台宗を持つて

來ることになれば、大變歡迎する、而も天台宗は聖德太子に御因緣のあるお宗旨ぢやと云ふ、そこで南都の坊さんも皆歡迎することになつた、併し傳敎大師は、支那の天台宗を其の儘に弘める積りではない、實は日本の聖德太子の佛法を弘める積りである、夫れだから傳敎大師の弘められた天台宗は支那とは薩張り違ふ、然るに德川時代になつてから支那流になつて了つた、夫れより以前の天台宗とは全るで違ふ、傳敎大師の天台宗はどんなものであるかと云ふと、大乘圓頓戒を以て形式を作り上げたお宗旨なんである、其の大乘圓頓戒と云ふのはどう云ふものであるかと云ふと、一體戒と云ふものは佛法で守るべき道德的規則である、其の規則に小乘戒と大乘戒との二種ある、小乘戒と云ふのは、お釋迦樣がお弟子の道德的取締りをなさるゝ規則である、大乘戒と云ふものはさう云ふ者ぢやない、盧遮那佛のお說きになつた戒法である、お釋迦樣は其の後お傳へなされ

ただけである、斯う云ふ譯柄になつて居る、言葉を換へて言へば、小乘戒は應身のお釋迦樣のお示しなされた戒である、又大乘戒と云ふのは、淨土の報身の佛樣のお示しなされた所の戒である、實地の上から言ふと、どう違ふかと云ふと、小乘戒は精神の方は餘り八釜しく言はない、形の方を八釜しく言ふ、惡い事を言うたり、惡い事をしたりしてはならぬ、惡い事をすると一ト口に言ふと地獄に落ちる、地獄に限つたことはないが、惡い事をすると自身の罪惡の爲に今度は恐ろしい目に遭はんければならぬから、惡い事をしてはならぬと云ふ風なものです、早く言ふと個人主義である、所謂人類基本と云ふやうな耶蘇敎で言ふ道德のやうなものである、ところが大乘戒と云ふものは、小乘戒と同じやうな處もあるけれども、大體は大變異つたものである、兎に角大乘戒と云ふものになると、心が大事である、精神が大事である、たとへ如何やうに口で間違つた事を言

うても、軀で間違つたことをしても、結構な精神で以て遣ると云ふことになれば、格別えらい妨げにはならぬと云ふやうな風で、精神を主とする、其の精神も利他を主とするのであるから、小乘戒のやうに自利的ではない、自身が罪を作つては恐ろしいと云ふのではない、自身は罪を作つて地獄へ落ちても宜い、此の軀は八ッ裂にされても構はぬ衆生濟度と云ふことになれば、自身の軀はどうなつても構はぬ、斯う云ふ精神である、自身の罪を恐れるのではない、早く言へば國の爲にならんければならぬ、社會の爲にならんければならぬ、自身が惡い事をせぬと云ふのは、自身の罪惡の結果を恐れてせぬと云ふのではない、たとへば國の爲になり、社會の爲になると云ふことなら、自身は罪を犯す、罪を犯した結果自身の軀が八ッ裂になつても構はない、夫れで社會の爲になり人の爲になるなら、これで滿足ぢやと云ふのが、これが菩薩の行なんで、卽ち此の大乘戒

の精神である、そこで之を日本だけで言ふ時には、國家的なんである、お國の爲になり天子樣の爲になることならドコまでも遣る、今の言葉で言ふと國家的觀念を土臺として自身は惡い事をしないやうにする、道に外れぬやうにして行くと云ふのが卽ち大乘戒である、そこで傳敎大師は其の大乘戒を弘めやうとした、形は違ふけれども、聖德太子の佛法と同じものなんである、聖德太子の佛法は、前にもお話いたした通り、御恩報謝と云ふ上から、始終國の爲になり天子樣のお爲になるやうにして行くのが、卽ち聖德太子の佛法なんである、言葉を約めて申せば、自身の私慾を離れ、我利々々根性を止めて、世の爲になるやう、人の爲になるやう、國の爲になるやう、天子樣の爲になるやうに、遣つて行けば卽ち物の道理に適ふ、夫れで世間法卽佛法である、と云ふやうな譯である、ところが此佛法を弘めると云ふことになると、聖德太子の時分とは時勢が違ふから

非常に六ケしい、なぜかと云ふと、南都の佛法各宗がある、都は山城に遷つても佛教は依然南都にある、聖德太子の時分には外に宗旨がなかつたから弘め易かつた、他に敵する者もなければ反抗するものもなかつた、けれども傳教大師の時には南都に佛教があつて、ソコから苦情を言ひ出したら忽ち妨げられて了ふ、そこで非常に困つた、夫れから門徒になると云うても弟子になると云うても、チヤンと規則が出來て居るから、所謂宗教法が出來て居るから、自分勝手に弟子を拵へたり門徒を拵へると云ふ譯には行かないそこで弟子にする門徒にすると云ふ時には戒法を受けんければならぬ、恰度本願寺で言ふお剃刀をするやうなものである、夫れをするには戒壇と云ふ戒法を授ける場所が要る其の場所は南都に立てゝあるから、傳教大師が勝手に拵へると云ふことは出來ない、そこで大乘の戒法を授けると云ふ戒壇を拵へようと掛つた、すると果して南都から抗議が出た、授戒は當時に在ては各宗の生活上の問題である、門徒を取られる譯になる、末寺を取られる譯になる、中々南都が承知しさうなことはない、そこで傳教大師と南都との喧嘩が起つたのである。其の時に傳教大師が朝廷へ差し上げられた奏文がある、其の中に仰しやつてある言葉の上から見ると云ふと、小乘戒は先刻言うたやうに、個人主義である、自利を目的とする、ところが大乘戒であると國家主義のものである、個人主義の小乘戒を以て此の國家を擁護すると云ふことは出來ない、私は大乘戒で國家觀念を養ふ處の佛教を弘めたいと思ふ、これで以て此の國家を擁護したい、皇室をお守りしたいと、斯う云ふことが書いてある、夫れで全く傳教大師の佛法は聖德太子の佛法の再興なんである。

そんならどうして大乘戒と云ふものを弘めて國民の國家道德を起すことが出來るかと

云ふと、これには一つ立派な教師を拵へんければならぬ、今日で言ふ宗教家を拵へんければならぬ、叡山に大乘圓頓戒を授ける立派な宗教家を拵へんければならぬ、其の宗教家を拵へるに就ても、完全なるものでないと感化が深く及ばぬ、本當の坊主を拵へんければならぬ、本當の坊主を拵へるにはどう云ふ具合にするか、卽ち學校を拵へんければならぬ、僧侶を教育する學校、卽ち僧堂を拵へんければならぬが、夫れはどう云ふ具合にするかと云ふと、傳教大師の意見では、十二ヶ年の間叡山の山の中へ這入り込んで本當の修行をさせる、その修行を天台行と眞言行との二科に分て、之を止觀業、遮那業と云ふ、十二年の間修行させて、極く好い成績で卒業した者で、卽ち道德も完全であり、學問も出來ると云ふものであると、夫れを國寶と云ふ、其の國寶なるものは叡山の管長になる、座主となつて宗門の支配をする、又十二年の間修行して、道德は左まで厚くなくとも、學問は立派に出來るものは國師として、其の者は、其の時一國に必ず一ヶ寺づつあつた國分寺と云ふものに配り付ける、又學問は淺いが道德は厚いと云ふものは國用と云つて、必要な場所へ配つて行く、恰度今日學校制度のやうなもので、國寶と云ふのは大學の校長、國師と云ふのは中學の校長、國用と云ふのは小學校の校長のやうなものである、斯う云ふやうな具合でズッと遣つて行つたならば、夫れは隨分立派に行くことになるだらう、大變其の邊の處は文明的の考へ、組織的の考へてあつた、之れを以てどうぞ朝廷を擁護し、國家を護りたいと云ふのが傳教大師の腹であつた、ところが情けないことには、南都の反抗があるものだから、傳教大師の御存生中は朝廷からお許しがなかつた、傳教大師が入寂せらると云ふと、直ぐ翌る月に許された、そこで初めて叡山と云ふものが獨立した、其の時から勝手に門徒を拵へ、勝手に弟子を拵へることが出來る

やうになつたのである、然るに叡山の獨立は宜いけれども、傳教大師が入寂せらると、夫れまでヂツと構へて居つた弘法大師が飛び出して、今度は朝廷の中へ這入り、朝廷の中に眞言院を拵へ、祈禱を始めたから、全るで朝廷は祈禱の場所になつた、そこで上の爲す處は下之に倣ふで、社會總てが皆祈禱と云ふことに傾いて、現世祈りばかりを遣るやうになつた、さう云ふ勢ひであるからして、折角聖德太子の佛法を再興せられた傳敎大師の佛法と云ふものは思ふやうに行はれぬ、叡山も斯うなつては仕やうがないから、矢ッ張り眞言に對抗して祈禱を遣らんければならぬことになつた、そこで慈覺大師が出で、智證大師が出で、支那から弘法大師の知らぬ祈禱法を傳へて來て朝廷へ這入り込んだ、そこで天台も眞言も共に祈禱をするやうになつた、さう云ふ譯であるから、折角の傳敎大師の結構な精神が思ふやうな具合に行かぬやうになつて、佛法は總て祈禱と云ふことになつて了つた、夫れが平安朝時代の佛法である、祈禱の結果はどうなるかと云ふと、誠に慘澹たる有樣になつて了はんければならぬ、唯だ現在の上の幸福を祈るとか、禍ひを攘ふとか云ふことばかりに心を取られて了つて、自身の本當の心の落付と云ふものは無くなつて了ふ、さうして國々には盜賊が起つて、追々兵亂が起つて來る、さうなると、持つて居つた田地も取られて了ひ、財產も奪られて了ふ、自身の息子が首を取られた、父が討死をした、兄弟が斬られたと云ふやうな具合で、實に慘澹たる憐れ千萬なものになつて來たのである、人民は唯だ暗黑の中にさまよふのみで仕やうがないやうな譯になつて來た。

其處に至ると、どうしても自然の要求として、本當の心の落付きを得ずには居られないやうになつて、社會の上はモウ安心は出來ない、田地を持つて居れば取られて了ふ、

財産を持つて居れば取られて了ふ、兄弟は討死をする、息子は殺される、自分もイツ命を取られるか分らないと云ふ有様になつて、此の現在の上では何一つ頼りになるものはない、さう云ふ場合には、精神上に確かりした頼りがなくちやァ立つて行く譯のものぢやない、そこで其の精神上の力になる處の、所謂念佛と云ふものが初めて現はれて來た空也上人忽ち山奥から飛び出して、尻褄からげて、京都の眞中を念佛を唱へて走り廻るやうになつて來た譯である、夫れがマァ平安朝時代の有様なんです。

ところがさう云ふことが段々と進んで頓との極端に至ると云ふと、今度又此の聖德太子の佛法を興さんければならぬ譯になつて、其の時に再興せられましたのが、卽ち親鸞聖人で、所謂眞宗と云ふものが玆に起つて來ることになつたのであります。

第十七　日本の佛教（十一）

平安朝佛教の狀態

前にお話を致した如く、弘法大師が出られてから後、祈禱が段々と盛んになつて、隨つて叡山の方でも祈禱を盛んにすると云ふ譯であつた、朝廷も民間も擧つて祈禱の方に向いて來るやうになつたのであるが、夫れで傳教大師の圓頓戒と云ふものは、全くなくなつたのではない、矢張夫れは夫れで叡山の中で專門に其の方の側を傳へると云ふ人もあつたのでありますが、傳教大師の思召しの如く、順調に向いて行くと云ふ都合には行かない譯になつた、祈禱の方がモウ當時では重になつて來た、其祈禱によつて叡山も高野と對抗して、追々勢力が出來て來て、外界の勢ひと云ふものは段々盛んになつて參る

のであるが、乍併南都の佛教と云ふものも、古い佛教ぢやとは申しても、長らくの間勢力を積んで來た跡であるから、矢張新たに起つた叡山や高野に比較すると夫れ以上の力がある、夫れで佛教界の實際の勢力と云ふものは矢ッ張り南都に握られて居る、今から考へると、叡山や高野と云へば非常なもの丶樣に思ふけれども、其頃の叡山や高野と云ふものは、今日から思ふやうなひどい勢力のあつたものではない、南都が矢張り一切の權力を握つて居るやうな具合であつた、然るに平安朝の眞中、即ち村上天皇の頃になると、叡山から慈慧大師即ち元三大師が出た、此の人は非常に偉い人である、學問の方の側から言うても非凡な人である、夫れから外界に向つて世間的の勢力を張ると云ふ側に於ても非常に腕のあつた人である、一と口に言へば眞俗に就て、非凡な人であつた、此の人の時代になつて、世間的の勢力と云ふものが一時にズッと盛んになつた、其代り、隨分ひどい事も遣つたものであらうと思ふが、水戸の方から出た大日本史の佛事志などによつて見ると、此の上もない惡僧のやうに言うてあるが、そんな譯でもないけれども、兎に角世間からさう思はれる程隨分遣つたものと見える、其の結果として、外界の勢力と云ふものは非常に盛んになつて來た、其の元三大師の力によつて本當に南都に對抗するだけの力が叡山に出來て來た、夫れまでは迚も南都に及ばなんだものと見える。

然るに此の元三大師の時分には、外界の勢力と云ふものは非常に盛んになつたのであるが、其の時が即ち精神の衰へた時である。これは佛教界のみならず總てが皆さうなんである、外界の方の側、物質的の方の側が十分に行けない時には、精神に非常に力がある、ところが精神界に於て、自身が目論んだ事が物質界に出來上ると、精神界の勢力と云ふ者は衰へて了ふものである、夫れで物質の盛んになつた時は精神の衰へる時である

國家でも其の通り、物質が極めて盛んになつた時は、モウハヤ精神界の方は腐敗を來たして來るのである、マア近い處を言へば德川時代もさうである、德川時代では元祿の頃に至つて中々物質的の方の側が發達したのであるが、此の時代に這入つて風儀と云ふ者が一般に亂れて、道德的の方の勢力は無くなつて了つた、そこで八代將軍が出て改革をする、精神界の方が稍々恢復して來たけれども、又時を經るに隨つて頽廢した、そこで寛政の改革と云ふものを白河樂翁公が遣られたのである、然るに夫れが又弛みが付いて物質の方ばかり盛んになつて、殆ど其の極に達したと言うても宜い位である、其の時が即ち十三代の家齊公の時代である、夫れが卽ち德川氏の幕政中一番盛んな時であつたが又夫れが即ち德川氏の一番衰へる時であつた、そこで山陽は日本外史の終りに『其の盛んなることを極むと云ふ』と一言で止めて了うた、あれらがマア大變趣きのある處で、あの盛んなることを極むと云ふ處に無言の味ひがあつて、そこにモウ德川時代は可かなくなつたと云ふことが言葉の中に含まれて居る。

備中の笠岡に家永と云ふ舊家があつて、其處は山陽が藝州へ往復する時に始終泊つた處で、山陽の書いたものが澤山ある、其の中に日本外史の草稿があつて、草稿であるからアチラコチラ朱や藍で直して、修正がしてある、先年私が行つて見たことがあるが、其の一番終ひを見た處が、原稿では中々長い、三行程も書いてあるが、夫れを段々段々直して行つて、到頭『盛んなることを極むと云ふ』と一言にして了つた。

その盛んなることを極むと云ふ一言と云ふものは、非常に味ひのある言葉である、其の盛んなることを極むと云ふことを、一方から言へば、其の衰へることを極むと云ふ程のことになる、外面で德川氏の勢力が頓と發達し盡した時、內面に於て力のスツカリ無く

なつた時である、そんなやうな具合で、物質の盛んなる時は非常に結構なる時であるけれども、精神の衰へる時であるからして、そこは一軒の家に取つても一人の身の上に取つても、餘程注意をして行かんければならないことであらうと思ふ。

昔の人は皆、子孫の事、身代の事に就て、始終かう云ふ考へを持つて居たもので、まづ一軒の家に就て言へば、ドコかに不足の處を存して置くと云ふことであつた、十分に何から何まで自分の思ふやうには遣らないと云ふのが、昔の人の家を持つて行き身を持つて行く祕訣である、金が十分あつても、必ず一軒の中には、茲は斯うありたい處ぢやと云ふ處を殘して置く、十分に思ふ通りに事を遣つて了うたら、其の時はモウ其の家の衰へる時である、私は學校などには幾らか經驗のあるものであるが、學校の本當の建築などが出來上ると、一應は一番盛んな樣である、盛んであるが又夫れが衰へる基となるものである、マア此の教育などと云ふことは、何んでも教場を拵へんければならない、講堂を建てんければならないと騒いで居るうちが一番宜い、夫れが思ふやうに出來上ると、アトの維持と云ふものが困難で、其の維持と云ふ方に力を費して、發展させると云ふことが衰へて來るものである。

萬事そんなやうな具合で、平安朝の叡山の有樣もさうである、元三大師の時が非常に盛んな時であつたけれども、夫れが即ち衰へる時であつたのである、叡山の外觀の一番盛んになつた時に、空也上人が都へ出たのである、夫れはどう云ふ譯であるかと云ふと前申した如く、其の時は民間に、佛教の感化力が全く無くなつて了つて、社會の人心は暗黑の中にさまようて居る、心の底に何一つ便りにするものもない、そこで空也上人が山から出て町の中で、尻づまけて念佛を唱へながら走り廻ると云ふことになつたのであ

る、ウカ〳〵して居る遑がないのである、實に自身の精神の耳を欹てゝ聞いて見ると、四方八方の人民が精神界に於て飢ゑ切つて居る、少しの間も休んで居ることが出來ないそこで當り前のユル〳〵した事で歩いては居れない、尻つまげて念佛を唱へ廻つたと云ふやうな有樣であつたのである、けれども叡山の山の中でも、隨分眞面目に修行をする人もある、圓頓戒を守つて行く人もないでもない、ありはするけれども、中々ホンマの事は出來ない、遣つて見ても遣つて見ても、中々自身の心に堪能の出來る程の事柄は出來ない、自身の心に堪能する處まで行けないとして見ると、夫れでヂッとして居る譯には可けない、何か自身の精神上に、本當に安心を得ると云ふことを求めずには居られないやうになつて來る、そこで民間で念佛が盛んに起ると共に、山の上でも念佛が起つて來た、其の代表者が即ち慧心僧都、所謂源信和尚である、これは非常な學者で、立派な學識を持ち、隨分修行の方面に於ても中々苦心した人である、今日の坊さんの如く、唯だ世間の生活の爲に學問をするとか、浮いた心で學問をしたのではない、小さい子供の時からして、自分の母親の深い信仰の上に育て上げられて、眞の坊主にせにやおかぬと云ふ母親の親切からして叡山へ登つて本當の學問を遂げられた人であるのである、一旦は母親に遇ひたくて、中途半で家へ歸らうと云ふ手紙を遣られた處が、母親は非常に怒つて、そんな中途半で歸つて來るやうなことでは私は逢はない、お前は何んの爲に叡山へ登つたのであるか、私の後生を救うて呉れる爲である、私の後生を救うて呉れる力の出來るまでは歸ることはならぬと云ふ誡めをせられたので、源心和尚は歸るのを止めて、眞劍に叡山で修行をせられたのであるから、學問の上から言うても、修行の上から言うても、非凡な人物である、非凡な人であるけれども、實際自分の眞の出

離菩提の心と云ふものは、其の學問や修行の上では得られない、いよ〳〵これで出離が出來ると云ふ見込みが立たない、

夫れ往生極樂の敎行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か歸せざらんや、但し顯密の敎法は其文一ならず事理業因其行惟多し、利智精進の人は未だ難しとなさざれども、予の如き頑魯の者は豈に敢てせんや矣。

天台宗であるとか眞言宗であるとか、結構なお宗旨ではあるが、其の宗旨の敎へる處によつて、實際修行をすれば、夫れで出離が出來ないと云ふ譯のものではないが、予の如き頑魯の者は、自身の上に引き當てゝ見た處では、其の結構な法も自身の上には何んの役にも立たぬ、其の法は結構に違ひないけれども、自身に引き當てゝ、自身が其の通りに修行せられぬと云ふことになりやア、何んにもならぬ話である、利智精進の人であつたなれば兎も角であるが、予の如き頑魯の者、私の如き詰らぬ者であつて見れば、結構な法でも夫れで私の出離は出來ない、さうすると何か外に出離の出來る法を求めんければならぬ、其の法は何んであるかと云ふと、念佛より外はないと云ふ處から、往生要集と云ふものをお書きになつた、今申した言葉は、卽ち其の往生要集の初めに出て居る言葉である、夫れだから其の往生要集に書かれた念佛と云ふものは、天台宗の天台大師の上にも說かれてない。天台宗で言ふ念佛では可かない、哲學上の高尙な理窟から出來て居る阿彌陀樣は、口で言ふ時には結構であり、頭のテツペンで考へる時は面白いけれども、そんな阿彌陀樣では矢張り役に立たぬ、そこで善導大師の念佛を御信じなされた、善導大師の念佛は、氣の利いた理窟のある念佛ではない、

『深く自身は現に是れ罪惡生死の凡夫曠劫より已來常に沒し、常に流轉し、出離の緣あ

ることなしと信じ、深く彼の阿彌陀佛の四十八願は衆生を攝受し、疑ひなく慮りなく、彼の願力に乘じて定めて往生を得と信ずる』

と云ふ其の二種深心から現はれて來る念佛である、夫れでないことには、いよ〳〵今度は間違ひなう自身の出離が出來ると云ふ安心が出來ないのである、夫れで天台宗でありながら、自身の心に御信じなされた念佛は、善導大師の念佛であつたのである、けれども自身の軀が天台にお在でなされたから、それを表向きにすることは出來ないのであるけれども、心の中に御信じなされた念佛は、爺さん婆さんの信ずる處と同じものであつたのである、唯の凡夫が佛にして頂けると云ふ念佛の上に信仰をお持ちなされてお在でになつたのである。

夫れで源信僧都のやうなお方がさう云ふ具合で念佛にお入りなされて、頻りに念佛を

お勸めなさる者であるから、外の人も段々と夫れに化せられる、化せられるけれども、矢張りさう云ふ爺さん婆さんの稱へるやうな念佛では氣に入らぬ人が多い、何か結構な理窟の付て居る高尚なものが信じたい、夫れはどうも少し書物を讀んだ者は其の癖が止まぬものである、そんならと言うて、念佛を除けて外にどうも好い法はないから、そこで其の念佛を矢張り氣の利いた哲學的の阿彌陀樣にして、さうして夫れを信じやうと云ふやうなことになつて來る、然し其後には又哲學的の理窟ばかりでも可かない、事實に何か一つ效のあるやうの念佛にならければ、可けないと云ふやうな說が段々出て來た、其の念佛が良忍上人の融通念佛である、今で言ふ大念佛宗である、これは觀念して唱へる念佛でもなければ、坐禪をして唱へる念佛でもない、念佛其の物の上に非常に高尚な譯柄が附いて居る、一人の念佛が萬人に通ずる、萬人の念佛が一人に歸すると、念佛